

2. キャリア意識の変容

授業の効果を検討するために、キャリア意識の測定尺度を2回実施しその変容を確認した。初回授業の冒頭(第1回)、および授業終了時(第2回)に下村ら(2009)「Career Action-Vision Test(CAVT)」を実施した。

この尺度は、キャリアガイダンスの取組を評価する効果測定用として開発されたもので、「Action」と「Vision」それぞれ6項目ずつ12項目から構成され、「そう思わない」～「思う」の5件法で測定するものである。「Action」は将来に向けての行動、例えば学外の活動や幅広い人脈を得るための行動などのさまざまな活動を積極的に行っているかを表し、「Vision」は将来に向けたヴィジョンや夢、やりたいことなどをどのくらい明確しているか、それに向けて準備しているかを表している。

第1回、第2回間の「Action」、「Vision」それぞれの得点について、対応のあるt検定を行ったところ、「Action」においては有意差がみられなかったが「Vision」においては有意差がみられた(「Action」: $t=0.00$, $df=14$, n.s.、「Vision」: $t=-2.52$, $df=13$, $p<.05$)。この結果から、2回のプログラム間で、「Action」に変化は見られなかったが、「Vision」は明確になる方向に変化したと考えられる。

さらに、「Vision」について項目ごとにt検定を行ったところ、「将来のヴィジョンを明確にする」「将来の夢をはっきりさせ目標をたてる」「将来のことを調べて考える」の3項目が有意に上昇していた(表参照)。

以上の結果より、この授業を通じて「Vision」すなわち将来に向けて目標をたてるなど、意識の変化が見られたことが示された。一方「Vision」のうち3項目、および「Action」には有意な変化が見られなかったことから、具体的に「やりたいこと」や行動に結び付けるまでには至らなかったものと考えられる。しかし、「Vision」、「Action」とも平均点は下村ら(2009)による基準値18点より高く、総じてキャリア形成に向けて積極的な受講生がさらに「Vision」の得点を伸ばしたと捉えることができる。

表 vision 得点初回、最終回の平均値,SD,t検定結果

	第1回		第2回		t値
	M	SD	M	SD	
将来のビジョンを明確にする	3.13	0.74	3.73	0.59	-2.55 *
将来の夢をはっきりさせ目標を立てる	3.20	1.08	3.73	0.46	-2.26 *
将来、具体的に何をやりたいかを見つける	3.67	0.90	4.00	0.38	-1.43 n.s.
将来に備えて準備する	3.33	0.90	3.40	0.51	-.25 n.s.
将来のことを調べて考える	3.20	0.86	3.73	0.88	-3.23 *
自分が本当にやりたいことを見つける	3.53	0.99	3.80	0.68	-1.17 n.s.

* $p<.05$. ** $p<.01$

文献：下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実(2009)大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発 キャリアデザイン研究, 5, 127-139.

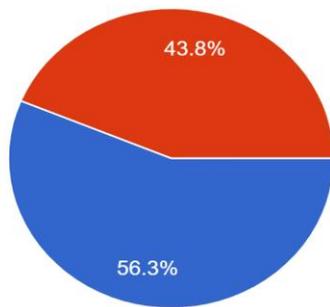
3. 授業に対する学生の評価

授業で実施したプログラムに対する学生の評価として5項目を、いずれも「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で測定した。

まず項目1「プログラムに興味を持てたか」については、56%が「あてはまる」と回答し、「ややあてはまる」と合わせて肯定的な回答が100%となっている。

1.プログラムに興味は持てたか

16件の回答

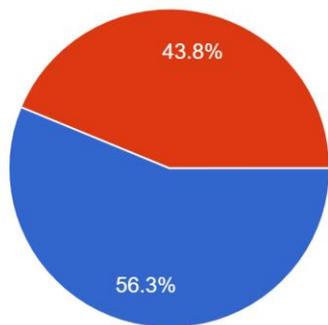


- あてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- ややあてはまらない
- あてはまらない

次に項目2「プログラムはわかりやすかったか」も同じく56%が「あてはまる」と回答、「ややあてはまる」と合わせて100%肯定的な回答となっている。

2.プログラムはわかりやすかったか

16件の回答

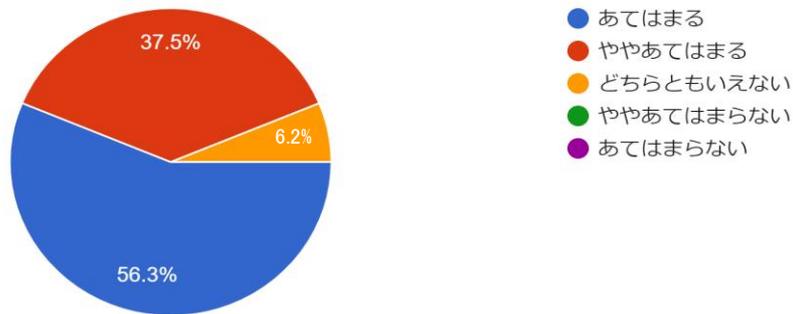


- あてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- ややあてはまらない
- あてはまらない

項目3「プログラムは楽しく進めることができたか」も同様に56%が「あてはまる」と回答している一方、6.3%が「どちらともいえない」と回答していた。

3.ワークは楽しく進めることができたか

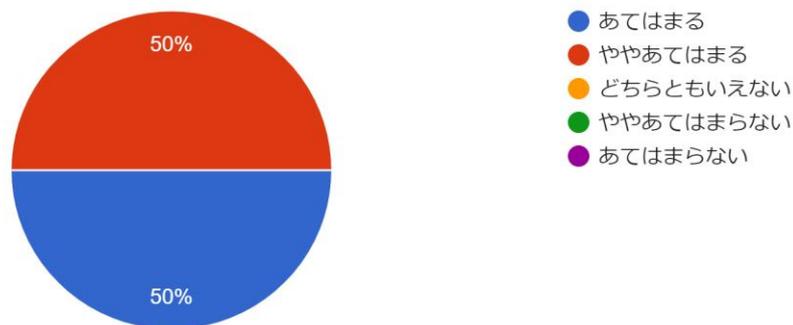
16件の回答



項目4「プログラムによりキャリアへの考えを深められたか」については、「あてはまる」が50%、「ややあてはまる」が50%と回答している。

4.プログラムによりキャリアへの考えを深められたか

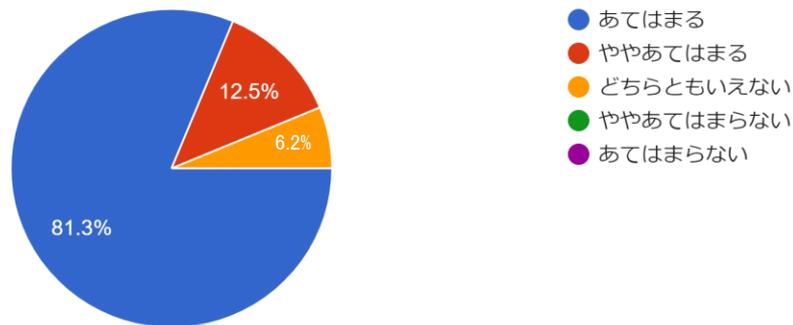
16件の回答



項目5「プログラムによる男女共同参画・ジェンダーへの考えを深められたか」については、81.3%が「あてはまる」、12.5%が「ややあてはまる」と回答し、「どちらともいえない」との回答も6.3%見られた。

5.男女共同参画・ジェンダーへの考えを深められたか

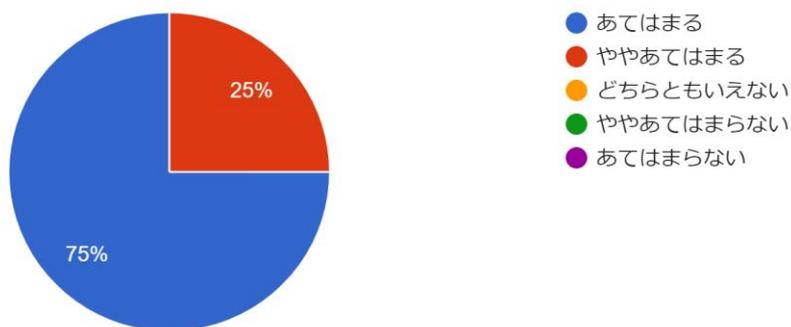
16件の回答



項目6「将来を考えるのに役だったか」は、「あてはまる」が75%、「ややあてはまる」との回答が25%であった。

6.将来を考えるのに役に立ったか

16件の回答



以上の結果から、各項目とも「ややあてはまらない」「あてはまらない」といった否定的な回答はなく、総じてプログラムに肯定的な評価が示されたと解釈できる。すなわち、本プログラムは、学生にとって興味関心を持ち、また本授業のねらいである「男女共同参画の視点でキャリアを考える」主旨が充分理解されていたものと考えられる。

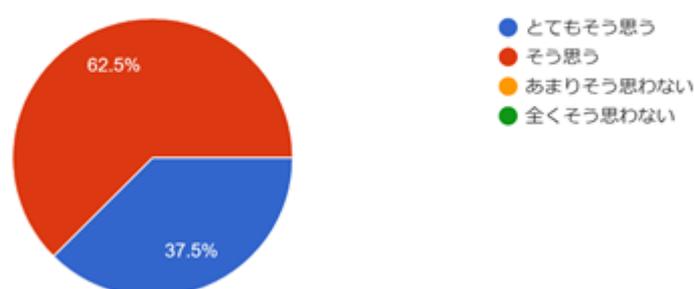
中でも「将来を考えるのに役だった」「男女共同参画・ジェンダーへの考えを深められた」の項目の肯定的回答率が高いことが特徴的である。昨年度実施した、全2回の自己理解プログラムおよび後述する今年度ユニットプログラム（帝京平成大学実施）では、総じて肯定的な評価であったが「ジェンダーへの考えが深まったか」については他項目よりは肯定的回答の割合が低かった。プログラムの対象、実施内容・方法等も異なるため単純な比較はできないが、今回教員側が工夫した点の一つである「キャリアとジェンダーの視点の架橋」について、本プログラムは学生の理解を深める効果があったものと考えられる。

最後に、オンライン授業についての評価を求めた。「対話やグループワーク、ヒアリングなどの時間を取り入れたオンライン授業は有効だ」の問いに対し、「とてもそう思う」～「全くそう思わない」の4件法でたずね、さらにその回答理由を自由記述で求めた。

この結果、「とてもそう思う」37.5%、「そう思う」62.5%、「あまりそう思わない」0%、「全くそう思わない」0%であった。今年度コロナウィルス感染症流行の影響で、急遽オンライン授業の対応を行った。オンライン授業のなかでも講義形式でなく、グループワーク・対話を取り入れることに工夫を行った。実際の対話と簡単に比較はできないと思われるが、他者の多様な意見を知ること、人の話をじっくり聴くこと、自分が伝えたいことを丁寧に伝えること、こうした点において今回のオンライン授業は一定の成果を得たものと考えられることができる。

16.対話やグループワーク、ヒアリングなどの時間を取り入れたオンライン授業は有効だ。

16件の回答



(回答理由)

- ・オンライン授業で対話が減ったなか、話すことの大切さを改めて知ることができたから
- ・遠くの方からも話を聞けるのは良いと思うため
- ・画面をただ見続けるよりも、自分以外の考え方を聞くことで、様々な意見のあり方について学ぶことも出来たから。
- ・さまざまな学生さんや社会人の方の意見や考えを直接聞くことができたからです。最初は質問できるかなと不安でしたがその不安は今ではありません。また、しっかり聞く力とそこから自分につなげることができました。
- ・Zoom等のオンラインだと、タイミングが掴みづらく、会話が被ってしまったりと、少し不便に感じる部分もありますが、お互い画面を通して話し合うことは自分にとって新鮮でした。

(5) プログラムまとめ～意義と課題

前項の効果測定結果、および前項では紹介しきれなかった学生の記述、スタッフの振り返り等をもとに、本プログラムのまとめとして意義と課題を述べる。なお、ここは本プログラムのまとめとしての位置づけであり、本事業の評価としては、IV. に各観点からの評価を記載している。

1. プログラムの意義～学生の学び

本プログラムの目的は、本事業の主旨および事業計画書にもあるとおり、学生が、主体的にキャリア選択に関わる能力・態度を身に付けること、そのために男女共同参画の視点に立ちつつライフイベントについての理解を深め、職業のみならず社会における役割等を含めたライフキャリアについて、長期的かつ多様な視点で考察する力を養うことにある。本プログラムによる学生の学びをまとめると、以下の点を挙げることができる。

○ 男女共同参画への理解、アンコンシャスバイアスへの理解と気づき

「女性に不利な状況があることがわかり、すぐに無くなることは難しいと思うが、個人として私はできることはしようと思った」「統計データから妻が圧倒的に家事を負担していることがわかり、（男性である）自分は将来積極的に家事を行おうと思うことができた」などの記述から、男女共同参画社会に向けての課題を理解するだけでなく、自らのキャリアと結び付けて意識されるようになったことがわかる。印象的だったのは、社会人ヒアリングにおいて、登壇者の男性が育児期に、より良い育児環境を求めて転職をしたエピソードを語った際、複数の学生が「家族の反対はなかったか？」といった質問をしたこと、またこれに対し登壇者が「家計は男性が支えるもの」という固定観念を指摘したことである。学生たちが自らのアンコンシャスバイアスを鋭く指摘され、気付いた瞬間であった。このプログラム全体への評価として「男女共同参画・ジェンダーへの考えを深められたか」の問いに対して93.8%が肯定的回答を示していたように、本授業を通して、固定的な性別役割分担にとらわれないキャリアへの意識が深まったものといえる。

○ 仕事と家庭の両立への不安、将来に向けての不安の低減

「ライフイベント（出産等）で仕事を辞めるという選択がなくなった」などの記述、アンケート項目「制度の整っていない職場でも仕事と家庭の両立が可能と考える」等への肯定的回答の増加から、学生が家庭実習や社会人インタビューの機会を通じて様々なライフイベントを具体的に思い描くことが可能になったと考える。また両立への不安に限らず、若者が抱きやすい漠然とした将来への不安に対しても「自分の将来に対する興味や好奇心を膨らませることが出来た」「自らのキャリアデザインの重要性について学ぶことが出来、将来への夢へ大きな原動力を得ることが出来た」などの記述、および「社会人になることが楽しみだ」などの項目への肯定的な回答割合の上昇により、将来への不安が低減され、前向きな意欲が喚起されたことがわかる。

○ 将来に向けての前向きな目標設定

上記と関連し、前向きな意欲がより具体的な目標設定や行動につながったことを示す学生も多くみられた。例えば「将来に向けてのあいまいな考え方では行動に移すほど強い意思にならなかったが、今では夢の実現のために具体的な学習計画を立てるようになった」などの記述である。このことは、キャリア意識(CAVT尺度)の測定において「Vision」に有意な変化が見られた結果を裏付けるものと言える。プログラムを通じて将来就きたい職業や目標が見つかったという学生、まだ具体的な職業は見つからないが、進路を決めるための行動に動き出した学生も見られている。

○ 視野の広がり：柔軟な思考

「結婚したら仕事は辞めなければいけないと思っていたし、それが自分にとっての幸せであると思っていた」、「一度就職したらめったなことがない限り転職したり辞めたりしないと考えていた。社会人の方の話を聞き、社会人になった後でも勉強しながら自分を見直したり転職することもあった」となど、固定的性別役割分担意識も含め、固定観念（アンコンシャスバイアス）への気づきと脱却が見られている。さらに「例え自分が就きたいと思う職業に就けなかったとしてもその仕事にやりがいを見つけることも大切」などより柔軟な思考に変化していることが見て取れる。

また「希望する職種は変わらないが、その仕事の可能性をより広く考えられるようになった」など、キャリアに対する考察が深まっていくプロセスも示されている。

○視野の広がり：時間的な展望

先述の視野の広がりという点において、キャリア展望にとって重要な時間軸すなわち長期的な視点の獲得がなされている記述も見受けられる。「就職や結婚がゴールと思っていたが、その後もスキルアップを図っている社会人の方の姿を知った。社会の変化に対応する力を持ち、変化に応じていくことを知ることができた。」「今は自分自身のことが最優先だが、何年か経つと子どもが生まれるなど、自分以外のことも大切に行動が出来なければならないという自覚が出来た」など、より長期的な視点に立ったキャリアへの気づきを得られている。

○人との関係性、コミュニケーションの大切さへの気づき

将来のキャリアを考える上で、人との関係性への意識が総じて高まっている点はこのプログラムの特徴の一つと言ってよいかもしれない。今後のキャリアを考える際、仕事、家庭その他の領域においても、他者と関わり相手を尊重しつつ自分を表現することの大切さへの気づきが見られている。そして他者との関係、とくにパートナーとの関係づくりなどにおいては「パートナーの意見も尊重し役割分担しながら共働きをしていきたい」など男女共同参画の意識も反映されている。

○学び、反応の多様さ

ここまで学生の主な変容・学びについてまとめてきたが、注目したい点として上記以外にも学生から多様な反応、学びの実感が得られたことである。それは、多様な人との関わりから、学生が各々の視点で学びとった結果と思われる。とりわけ多くの学生が指摘していたことは、受講生同士のディスカッションからの学びの多さである。実習やヒアリングによる社会人、子どもとの関わり自体も学びであるが、その後のディスカッションによって「同じ話を聞いていても学生によって反応が異なることがまた学びになった」、「同じことを考えていることがわかり共感できた」など、体験を共有しつつ多様な価値観に触れることにより視野が広がっている。このような「他者から学ぶ」の姿勢が、キャリアを考えるうえでも「人との関係性」の重要さへの気づきにつながったとも考えられる。

2. プログラムの課題

学生たちの学びの一方、今後のプログラム改善に向けて以下のような点が課題と考えている。

まず、家族形成が結婚（異性カップルで子どもがいる）による家族が前提として伝わった可能性がある点である。本プログラムは、前提として特定の生き方を推奨するものではないことは学生にも強調している。しかし体験先は小さな子供を育てる共働き家庭であったため、ワークライフバランスも仕事と子育ての両立に焦点化して理解された可能性がある。もちろん自らがどのようなライフコースを歩むにせよ、共働き家庭の実態を理解することは意味があるが、昨年度のプログラムでは外部講師により性の多様性のテーマも組み込んだように、家族の在り方もより相対化して伝えられるよう今後考慮すべき点と考える。

また、自らのキャリア上の課題が制度・社会課題であることへの気づきの促し方には工夫が必要と考える。たとえば子育てに関する制度が整っていない（父親の育休が取りづらい、時短勤務は母親が選択することが多いこと）ことをどのように乗り越えるかという学びにおいては、その制度の中で個々が奮闘する姿を学生が学び取ることの重要性は失われないものの、制度を整えたり変えていくためにどう働きかけられるのかという視点は不足していたと思われる。実際に会社の制度に働きかけて勤続する方の体験談を聞くなどの工夫も考えられる。

地域活動についてはもう少し取り入れたかった点である。学生の関心は地域よりも就職、企業の方を重視する傾向にある。しかし例えば、育児についての話を聞くうちに地域での人のつながりに目が向く学生もいた。今後プログラムで地域の施設や子育て資源を意識的に紹介することなどにより、地域における生涯学習の視点を身に付けることも検討したい。

上記の、制度（環境）や地域への働きかけも含めて「行動」を喚起する点は今後の課題と言える。キャリア意識尺度 CAVT でも「action」には有意な変化が見られなかったことから、実際の行

動につなげるために、事後のフォローアップや可能なら発展的なプログラムなどの時間や機会が望まれる。

以上の内容的な課題とは異なるが、学生へのサポートについても課題が挙げられる。正課授業の場合は正課外の任意プログラムと異なり、参加意識が幅広いことを実感した。授業内容を十分理解し意欲をもって取り組む学生が多いがその一方で、シラバスをよく理解せず登録をする学生や、期間中部活動やインターン等の活動が忙しく、比較的予復習が不十分な学生もいた。学生の理解度や意識の幅広さに寄り添う支援を考えることが必要であることも明らかとなった。

3. オンラインでの実施について

最後に、オンラインでプログラムを実施した点について、オンライン授業全般における意義や課題は別に譲り、本プログラム内での意義と課題に触れる。前出のアンケート項目「対話やグループワーク、ヒアリングなどの時間を取り入れたオンライン授業は有効だ」に対し肯定的回答が100%であった点、またこれまで紹介してきたプログラムに対する評価をふまえると、オンラインにおける本プログラムの有効性は十分示せたものと考えられる。確かに家庭実習においては、実際の家庭の雰囲気や味わったり子どもとのふれあいを体験できなかった点は残念である。一方、オンラインにより複数の家庭と同時に関わることができ、学生だけでなく家庭間でも交流の可能性が広がるなどのメリットも感じられた。

一方、オンラインでの課題として挙げられるのは、学生同士のグループの育成である。グループでの話し合いも、オンラインの場合は一人ずつ順番に話すことになり、複数の話題を出し途中で切り替えたり、気軽な雑談などもしにくい。こうしたコミュニケーションの在り方により学生同士の関係性が作りにくく、グループでの協力関係も築けてはいたものの対話型の授業と比べて弱いものであったと考えられる。今回ツールの工夫や各グループに教員、学生SA、スタッフがファシリテーターとして参加しサポートを行ったが、オンライン環境の不調が生じる者も含めて、より良いサポートについて今後さらに考えていきたい。

3. 教材開発

(1) 人生双六・人生双六データ資料 2020 年度版の作成

本項では、講義のポイントとなる性別役割分担意識などジェンダーに関わる視点とキャリアデザインに関わる4つの領域との関連性について、学生が円滑にイメージできるようにするための教材として作成した「人生双六」と「人生双六データ資料 2020 年版」を取り上げる。これらは2回の講義（第4回、第5回）のなかで紹介され、受講生に実際の使い方やその内容などが説明された。また、受講生による最終プレゼンテーションの際にも、人生双六データ資料集で取り上げたデータが活用された。

1. 人生双六

①作成の目的とプロセス

本事業で教材として人生双六を作成した目的は、ジェンダーや男女共同参画の視点とライフデザインに関連する4つの領域の視点が、人生（ライフキャリア）の様々な場面で相互に影響してくることを、双六を通して可視化し、学生の理解を促す点にある。講義内で双六を実施することによって、学生は社会におけるジェンダーにもとづく様々な課題や性別役割分業意識の存在に気づくとともに、キャリアを職業としてとらえるだけではなく、家庭生活、趣味・自己啓発など個人の活動、ボランティアや地域との関わりなど社会的活動を含めて、多面的に自身のキャリア形成を考えていく必要があると意識するようになることが目指されている。人生双六は、ジェンダーの課題とキャリアデザインを結び付けて考えるためのツールの役割を果たそうとするものである。また、本事業はアクティブラーニングを取り入れた講義であることから、人生双六を実施するなかで、学生同士、学生と教員、SA、TAなどとの心理的な距離感が縮まり、その後の講義内のコミュニケーションを円滑にする効果も期待される。

2020年6月11日、人生双六の作成にあたり本事業のメンバー4名による第1回双六ミーティングをオンラインで実施し、大まかな方向性を検討した。その後、他機関による双六の内容等を調査した結果、本事業で意図する双六は、他機関が作成した既存の双六とは目的や性質が異なり参考にするのは難しいこと、2019年度神奈川大学法学部開講の講義「公共のあたらしいかたちをもとめてージェンダー」において作成した人生双六が、当事業で意図する双六のイメージに比較的近いものであることを確認した。

7月9日、第2回双六ミーティングにて、ゼロベースから人生双六を作成するのではなく、神奈川大学の講義で性別役割分担意識などジェンダーの影響を理解するために作成された人生双六をベースにして、キャリアデザインの視点を取り入れた人生双六を新たに作成することを決定した。ポイントは、キャリア選択をできるようにすること、ジェンダーフリー、ポジティブな表現にすることなどであり、大学生が知っておくべき現状として統計データも紹介することとした。

8月11日、定例ミーティングにて作成途中の「人生双六」を提示して関係者から意見や感想などをもらうとともに、課題となっている点について助言を得た。これらのコメントを人生双六の内容に反映させながら、引き続き、作成を継続した。

9月4日、人生双六とデータ資料集の完成案を提出、8日の定例ミーティングで完成案の当面の取り扱いなどについて意見を交換した。

9月29日、事業メンバーの要望などを反映させた最終版「人生双六」のオリジナルデータを事業担当教員2名に提出した。

②講義における使用状況

作成した人生双六は、第4回「ジェンダーとキャリア」の講義（担当：井上匡子教授）の導入部分で紹介された。キャリアとジェンダーのつながりを理解するために、製作者が人生双六の趣旨

とポイント、データ資料集について説明した後、ジェンダー論の講義に先がけて、担当教員が遠隔で学生とジャンケンをして進むコマ数を決める人生双六ゲームを実施した（所要時間10分程度）。教員と10回にわたるジャンケンを行い、双六の各コマの内容を考え、キャリア選択をしながら進むゲームには、講義の雰囲気をやや和やかにする効果があり、参加した学生、教員、SA、TAとも、楽しみながらジェンダーとキャリアの関連を理解した様子が見えられた。オンラインによる遠隔のジャンケンであるにもかかわらず、担当教員の事前準備によって順調に実施することができた。

③課題と方向性

好評のうちに人生双六ゲームは終了したものの、第4回講義終了後の振り返りでは、双六ゲームを講義冒頭ではなく中盤に実施することを提案する声などもあった。限られた時間でジェンダー論の講義内容が学生にしっかりと理解されるよう、双六ゲームを実施するタイミングを検討する余地もある。今後も、人生双六ゲームを講義で実施することは有効であると考えられる。その一方、社会環境の変化や時々の状況なども踏まえて、人生双六の各コマに記載された内容の見直し、改訂なども必要となろう。第14回の最終講義時には、学生から人生双六を評価する感想も複数あがった。学生にとって理解しやすい教材となったこと、キャリアとジェンダーを結び付ける役割を果たす内容となったことが確認された。

2. 人生双六データ資料 2020年版

①作成の目的とプロセス

大学生が社会の現状の一端を客観的な数値や傾向から把握し、理解をより深められることを目指して、人生双六のコマの内容に対応した統計資料などを取りまとめた「人生双六データ資料集2020年版」を作成した。人生双六と資料集の対応が容易に分かるように、データで現状を確認できる内容については、各コマ内に「✓FACT」を示すアイコンを記載した。アイコンが記されている人生双六のコマは、性別によって現状が大きく異なることを示す内容が多くなったものの、データ資料集は男女の別なく大学生がライフキャリアを考える時に理解しておくべき事柄、参考になるであろう事柄を広く扱うようにした。

7月9日、第2回すごろくミーティングにおいて、人生双六の作成について検討するとともに、大学生が知っておくべき現状として統計データを紹介することを決定した。

8月11日、人生双六の各コマの内容案が完成に近づいてきたため、各コマの内容をエビデンスとして示す統計資料の選定や収集、資料の提示形式の検討、原稿作成を開始した。

9月4日、人生双六とデータ資料集の完成案を提出、8日の定例ミーティングで完成案の当面の取り扱いなどについて意見を交換した。

9月29日、事業メンバーの要望などを反映させた最終版「人生双六データ資料集2020年版」を事業担当教員2名に提出した。

②講義における使用状況

人生双六データ資料集は、第5回「キャリアとジェンダー」（担当：荻野佳代子教授）の講義でキャリアの内容説明とともに資料集の該当箇所が参照されるなど、実際に使用された。取り扱った箇所は、性別役割分担意識、ジェンダーギャップ指数、進路選択、就職、結婚、出産、育児、介護である。これらを参照しながら、就職、結婚などのライフイベントをとりまく状況・環境は男女によって異なることが説明された。オンライン講義では、学生が資料集を見る様子を確認することは難しいけれども、担当教員が画面共有でデータ資料集の該当箇所を映して説明したため、学生は資料集の該当する記載を確認することができた。

③課題と方向性

データ資料集の課題は、データの更新である。2020年版は事業の一環として作成することがで

きたが、事業終了後は教材を使用する教員が資料の出所などを確認して、新しいデータを掲載する必要がある。資料集のデータは、毎年発行される内閣府『男女共同参画白書』を使用するようにするなど、更新の負担を軽減するように努めた。今後はデータ更新の方法、扱うデータの検討を行うことなどが求められる。他方、データ資料集が、学生への教育効果を高めることも確認できる。現状を統計データなどで示すことは学生の理解を深めることにつながっており、それは最終講義時の学生のコメントなどからも伺えた。統計資料などのデータから現実を読み取る能力は、学生にとって今後も必要なものになると考えられる。

(2) サニー・S・ハンセンに基づく「4領域シート」、「統合シート」、「ステップアップシート」、「オンデマンド課題」の作成

1. 「4領域シート」、「統合シート」、「ステップアップシート」の作成

昨年度の取組「自己理解プログラム」において、サニー・S・ハンセンの「統合的人生設計」を基盤とした教材、「4領域シート」と「統合シート」を開発した。これはワーク・ライフバランスにおける4つの領域（4L）、「仕事(Labor)」「家庭(Love)」「余暇(Leisure)」(本プログラムでは「余暇・地域」とした)「学習(Learn)」における役割、さらに領域間の「近接領域」を考えつつ

「統合」的にキャリアを捉えることを目指すものである。ハンセンの理論は、キャリアを統合・多様性・男女共生などの視点からとらえることを主張するもので、本プログラムがねらいとする、男女共同参画の視点とキャリアを架橋するのに適した理論と考えられる。

今年度授業においては、この「4領域」を、初回から最終回まで学生がキャリアを考えるうえで通底する視点とした。授業で内容を扱うだけでなく、昨年度のシートに加えて「ステップアップシート」を作成し、授業を4つの視点から振り返り、気づきを記入することを毎回の授業後の課題とした。

第1回授業では、ライフキャリアについて説明し「4領域シート」を作成、学生同士共有した。次いで第5回授業では「4領域シート」を発展させたかたちとして、「統合シート」を見せながら「統合」概念について説明し、以降の実習等に活かす視点を提供した。第8回と第9回に実施したオンデマンド課題では、神奈川県の手帳を用いてロールモデルのキャリアを「4領域シート」および「統合シート」に落とし込む作業により、領域間の重なりや統合を具体的な理解につなげることを目指した(詳細は下記「多様な働き方～『MEET ME BOOK』から考える」課題の作成参照)。そして、第10回目、2回の体験および授業内容を振り返ったうえで各自の10年後の姿を「統合シート」に記入させた。最終的に、学生はこれらをまとめて各自の発表へとつなげた。

本教材は、後出のユニット型プログラム(帝京平成大学)でも使用している。シートの特徴は、4領域別だけでなく「統合」を考えさせる点にある。例えば、「愛・家族」と「余暇・地域」が重なる領域は、「地域の子育て支え合い」などが考えられるが、なるべく具体的な情報や、昨今の新しい働き方の例(例えばワーケーションはワークと余暇・地域をつなぐ働き方と考えられること)等を紹介しながら説明した。やや抽象的で言語化することが難しいことも想定されたが、学生からは、「各領域のつながりを意識することで、新たな可能性や課題が見つかった」「やりたいことの優先順位が明確になり、バランスをとることの大切さに気づいた」「人との関係性が大切なことがわかった」など、より視野を広げたり、より具体的現実的にキャリアを考えることを可能にする手ごたえを感じる事が出来た。

2. オンデマンド教材「多様な働き方～『MEET ME BOOK』から考える」課題の作成

1.に加えて、プログラムの中間課題として使用したオンデマンド教材を開発した。この教材はハンセンの4領域、統合シートを基盤とし、教材からロールモデルのキャリアを読み取り、分析することをねらいとしたものである。学生は、本課題を通じて他者のキャリアを「4領域」「統合」の視点でとらえることを学び、その後の回では、自身のキャリアを「統合」の視点で捉えることにつないでいく。なお、ロールモデルから学ぶための教材は、実行委員として加わって頂いている、神奈川県の手帳キャリア教育支援教材「MEET ME BOOK」を用いたものである。

実際に使用した課題内容および実施報告は、前出の授業実施報告第八回の後に記載している。(課題内に4領域シート、統合シートも示している)。

4. ユニット型プログラム

(1) ユニット型プログラム_帝京平成大学

ワーク&ライフデザイン教育プログラム～両立キャリアを想像する

【実施概要】

- ・日時：2020年11月10日（火）10:40-12:10
- ・プログラム実施担当：帝京平成大学大学院 臨床心理学研究科 馬場洋介教授
- ・受講者：臨床心理学修士課程在籍学生 11名
（修士1年8名、2年3名／男性2名、女性9名／5名は社会人経験後入学）
- ・対面での実施

【授業全体の目的】

- ・ワークを含むライフ全体の役割と長期的なキャリアを考える
- ・ライフイベントのうち、「働く」と「子育て」の両立について考えることを通して、「働く」「家族」「学ぶ」「余暇」の役割とその「統合」について意識を向ける

【終了後の学生のイメージ】

- ・キャリアに関する基礎的な知識を知りキャリアについて4領域で考えられる
- ・「共働き」家庭の実態を知ることを通して役割の「統合」を理解する
- ・10年後の自分の姿への具体的なイメージが広がる

【進行】

時間	内容の詳細	備考・留意点他	資料
10:40～10:50 【10分】	本日のプログラムの説明	・映像視聴環境の確認	・ワークシート確認
10:50～11:05 【15分】	キャリア概論 ・ライフキャリアとは ・「統合的キャリア発達」	スーパー、ハンセンの理論を紹介しながら、長期的輻輳的キャリアの視点を提供する	
11:05～11:30 【25分】	【ワーク1：動画ワーク】 ワーク説明5分 1 夕食シーンM家3:40 2 夕食シーンH家3:24 具体化声出し 5分 全体感想シェア 5分 ⇒映像を見る視点＝子どもの変化・親の工夫・親1人か2人かの違い ⇒共働きの多様さを理解する ⇒両立のための工夫に気づく ・感想のシェア	動画アクセス 保育園から帰宅し、夕食、風呂等のシーン。両親二人が関わる家庭と、母親ひとりが関わる家庭の2パターンを視聴。 ※メモを取りながら動画視聴を促す	
11:30～12:00 【30分】	なりたい姿ワーク4領域と統合		領域別シート

	<ul style="list-style-type: none"> ・ワーク説明：（5分） ・ワークシート（領域別シート） ：個人ワーク（10分） ：ペアワーク（5分×2） ←各自2分で説明しあう ←統合シートに話し合いながら記入（5分） ディスカッションしながらでよい ←「統合」に向けて「思い込み」への気づきや工夫があったか 	10年後の自分を楽しい気持ちで想像してみる。最初の個人ワークでは、領域別シートに記入する。その後ペアで説明し合い、話し合いながら統合シートへ記入をしていく	統合シート
12:00~12:10 【10分】	まとめ アンケート	アンケートフォームより回答	

【振り返り】

◎実施プログラム振り返り（概要）

- ・履修者たちにはおおむね好評で、楽しみながら参加できていた。履修者は臨床心理学を専門としているため、人の人生に関わるという点では素地があるが、日ごろ他者を支援する視点で人を理解することが身につけているため、人生をライフ・キャリアとしてとらえることは新鮮な視点として受け止められたようだ。
- ・全体として時間はぎりぎりで、足りない印象がある。履修者は心理学専攻でキャリアについて基礎知識があるため前段の説明を短めに、振り返りの時間を多めにしたが、もっと振り返りの時間が欲しいところ。自分のキャリア・将来を考えることに主眼がおかれ、ジェンダー理解が少し弱めとなった。
- ・ジェンダー理解を促すためには、映像のシーンの掘り下げ方を工夫するとよいだろう。帰宅後の一連のシーンで夫婦が共同しているところなどを強調してもらえるとよい。さらに例えば、映像に出てくる共働き、ワンオペの家庭の背景となるデータ（女性の労働環境など）を示すなどがあり得る。あるいは、映像を見る前に4領域シートに回答し、視点を先に提示しても良いかもしれない。
- ・理論→ワークの順よりも、まずは具体例を示してから理論の方が理解が進む可能性がある。

◎受講者の学びと反応（受講者による振り返りと効果測定は別途記載）

- ・共働き家庭の映像から、一言で「共働き」と言っても多様なあり方があり、「共働き」という言葉からもつ固定観念への気づきが得られている。さらに、共働きの大変さも工夫により乗り越えられるといった、前向きな見方に変容している。
- ・ワークは、楽しんで取り組むことが出来ている。「楽しい気持ちで想像する」という設定にもよるが、加えて、4領域という領域・視点の広がり前向きな気持ちをもたらすことが伺える。
- ・「統合」の視点の有効性が見て取れる。難しく感じた受講者もいるが、統合の視点により、自分にとって大切なもの・優先順位がより明確になり、例えば仕事領域のみに偏らない、バランスをもったキャリア展望につながる様子が見られた。
- ・今回の映像とワークから、キャリアを時間軸でとらえたり（過去・現在・将来）、自分だけでなく、自分の家族や、他者の人生を見る視点としても意識されるなど、視点の広がり得られている。振り返りにおいても多様な反応が得られている。

◎プログラム改善に向けて

○タイムスケジュールの見直し＝大学授業の枠だと1コマの時間帯の制約はあるがワーク、ディスカッション、全体シェアの時間がもっととれるとよい。

○振り返りの重要性と構造化の可能性

・今回、振り返りとして、ワークの振り返りとプログラム全体に対する振り返り、2段階で行ったことは有効といえる。ワークの振り返りでは、自分の生き方、キャリアについて考えを深め、プログラム全体の振り返りでは、クライアントの生き方をどう受け止めるか、などより広い視点での考察が行われている。「何かまとめて結論を出す」というより、視点の多さに余韻を残すような振り返りでよいだろう。一方、自身の価値観やアイデンティティに迫る振り返りも見られている。のちにこのプログラムや4領域の視点を思い出してくれることもあり得る。

・振り返り用のシートをより構造化して作成するなど有効と考えられ、今後の検討課題である。

○講師側の構え＝教える側の視点、キャリアに関する理解・考えが講師側に必要。自身の体験談があっても良いだろう。受講者に対し、指示的になるより、ともにキャリアを考える仲間、ファシリテーター的な役割が望ましい。講師自身もいきいきと、現在進行形のキャリアを生きる存在として示せるとよい。

【4領域シートを使用したプログラム～今後の発展に向けて】

◎キャリア展望＝人との出会いへの注目

まず受講者が未来展望に前向きになり、働くことへの不安をとることが大切。ジェンダーをふくめ多様な人間関係、多様な生き方への理解が深まることで視点が広がり前向きにもなれる。一方、一人では解決できない課題に対する、サポート希求力、リスク対応能力の醸成も必要といえる。

◎キャリアとジェンダーの連関

・4領域シートの重なるところ、統合を強調することにより、キャリアとジェンダーの重なりについての理解が可能となりうる。まず、領域の重なりを考えることで「人との関係性」が考察に入り、そこからジェンダーの視点へと深められるだろう。

今後、「人とのつながり」観点をシートに入れこむ、すなわち、4領域別に人との関係性（SNSでの関係なども含む）、サポートについて整理しても良いかもしれない。図（エコマップ）を加えることもあり得る。

◎ターゲット別（大学、社会人）に理論で説明することも大切

大学生には、前向きさとともに、一歩踏み出す勇氣、意図的な選択（行動理論）も学んでほしい。一方で計画された偶発性理論なども必要。今回の4領域シートでは、10年後に向けての行動（目標設定、方向性）を4領域別に設定することも有効と考えられる。

社会人向けのプログラムとしても有効である。社会人向けには、計画された偶発性理論をより強調し、克蘭ボルツの提唱する5つの行動特性の獲得などを内容に含めても良いだろう。

【プログラム効果測定の結果】

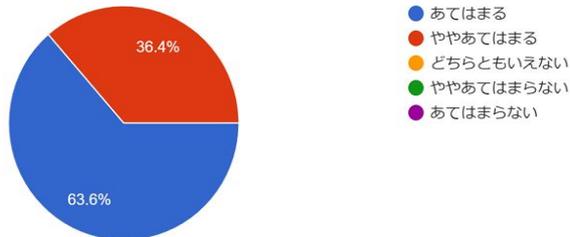
プログラムに対する評価に関する6項目および自由記述について、履修者11名より回答を得た。なお、各項目は「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で測定している。

この結果を下記図に示した。なかでも、問6「(このプログラムが)将来を考えるのに役に立ったか」は100%（全員）が「あてはまる」と回答したのをはじめ、問4「プログラムによりキャリアへの考えを深められたか」81%、問3「ワークは楽しく進められたか」81%、問2「プログラムはわかりやすかったか」72%など、好意的な評価が得られている。一方、問5「男女共同参画・ジェンダーへの考えを深められたか」は「あてはまる」45%、「ややあてはまる」36%、と概ね肯定的ではあるが、他項目と比べると低い評価となったことは、先に述べた振り返りとも一致しており、今後の課題となった。

また、自由記述からはキャリアへの理解を深めるうえで対面でのワーク、ディスカッションの意義が示された。今回、正課プログラムはオンラインでの実施であるが、本プログラムにおいては対面でワークを行う、その有効性が示されたといえる。

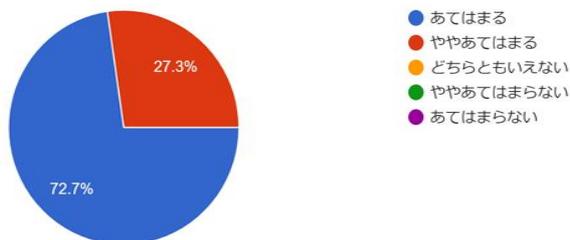
1.プログラムに興味は持てたか

11件の回答



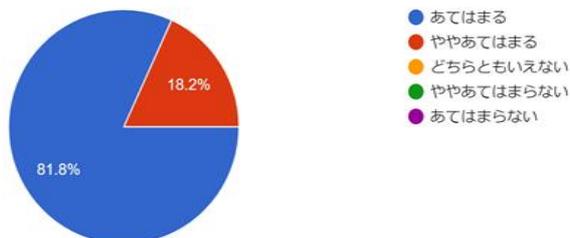
2.プログラムはわかりやすかったか

11件の回答

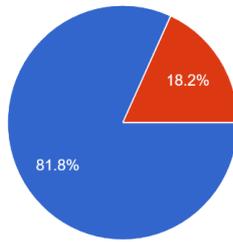


3.ワークは楽しく進めることができたか

11件の回答

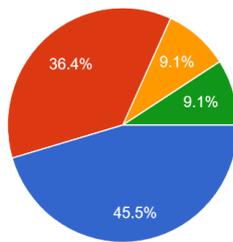


4.プログラムによりキャリアへの考えを深められたか
11件の回答



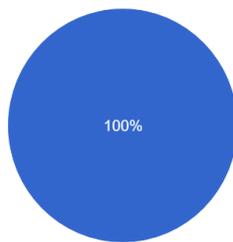
- あてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- ややあてはまらない
- あてはまらない

5.男女共同参画・ジェンダーへの考えを深められたか
11件の回答



- あてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- ややあてはまらない
- あてはまらない

6.将来を考えるのに役に立ったか
11件の回答



- あてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- ややあてはまらない
- あてはまらない

プログラム評価～自由記述

仕事、愛・家族、学習、余暇・地域の4つに分けて考える際には何かしらを書けたが、その次のステップを考えるのが難しかった。より具体的に考えることが難しかったのだと思う。また、自分の結婚願望について確認できる良い機会となった。

キャリアについてじっくり考える機会がなかなかなかったので今回個人ワークやそれを共有することで、キャリアについての理解が深まりました。

世代的に夢を持つ事を忘れてる、その希望を捨ててる学生も多く見られると思います。そのような課題を抱えている学生にも役立つプログラムだと感じました。特に大学生になり、新たなヴィジョンを掲げる上で必要なプログラムだと思います。学生の自我同一性などを支援してくれると思います。

生活全体で、将来のことを考えられ、気付かされたことも多くあった

今回は短い時間の中で考えてシェアしたので、もう少し時間が欲しかったなと思いました。

大学院での学習や家庭生活に追われて余裕がない毎日を送ってきましたが、今日ワークに取り組むことで、自分が大切にしたいことや目標を改めて意識できるようになりました。最近疲れてネガティブになりがちでしたが、ワークの間はワクワクして、やる気や活力を取り戻せました。

10年後の自分を具体的に考える機会となった。ただ「これやりたい」「あれやりたい」と考えるだけでなく、それらを統合して考えることで、より現実的に整理されて自身の将来について考えることができたと思う。

10年後の自分でのグループワークを行って、メンバーから質問を受けたり、意見を聞いたことで、自己理解が深まったと思いました。

実際にワークシートを使って自身のキャリアについて考えることができた。また、ペアワークをすることで、他の人の価値観やキャリアについての考えに触れることができ、視点が増えたように感じられた。

【プログラム資料PPT（抜粋）】

ライフキャリアとは

◆ 仕事と仕事以外の活動、生活全体からなる**ライフキャリア**

Life Career
(広義のキャリア)

仕事以外の個人生活

- ・ 家庭生活
- ・ 地域社会との関わり
- ・ 個人の活動（自己啓発、趣味）

現在の政治・経済・社会状況、
およびそれらの将来変化

Work Career
(狭義のキャリア)

- ・ 仕事の経歴
- ・ 職務内容

Cf.神奈川県ライフキャリア教育プログラム

共働きの家庭の 「帰宅後」のイメージ

共働きの家庭の
帰宅後のイメージを、動画で見てください

帰宅後どんなことをしているのか？

17:00頃 帰宅

17:00頃 通勤

17:40頃 保育園 保育士お迎え

18:00頃 食事の支度

18:30頃 食事

19:00頃 遊び お風呂

21:00頃 寝かしつけ

動画ワークの方法

動画を見る

➔

気づき・感想を
シェア

「帰宅後の様子」だけでなく、
こどもの気持ちの変化、
親・兄弟との関わりに注目して、見てみましょう

ワークショップ 10年後（00歳）の自分を想像しよう

～自分の可能性に制限をつけず、ワクワクして記入しよう～

<p>【仕事】 どのような？ どのような仕事をしている？</p> <p>様々な活動をしている人と 様々な価値観の人と 複数のプロジェクトをしている</p> <p>どんな人と、どんな仕事をしている？</p>	<p>【愛・家族】 親兄弟・パートナーとの関係は？ 子どもはいる？</p> <p>子どもが生まれて パートナーと子どもと 3人の生活</p> <p>親兄弟・パートナーとの関係は？ 子どもはいる？</p>
<p>【学習】 学んでいること、向上させたいの 興味、関心あること、 やりたいこと</p> <p>仕事に関する学習、資格取得 料理教室に通いたい 旅行や芸術など日本文化に関する 新しい事もやってみたい</p> <p>興味・関心のあることは？ 向上させたいことは？</p>	<p>【余暇・地域】 週末は仕事を忘れて 自然の中で楽しんでいる 自分の時間を大切にしたい ダイビング仲間が欲しい キャンプとかアウトドア</p> <p>好きなこと、 好きな時間？ どんな友達、仲間と？ やりたいこと</p> <p>好きなこと、好きな時間は？</p>

記入：10分

ワークショップ：4つの役割の統合を考える

【統合】
10年後の自分

【仕事】 どのような？ どのような仕事をしている？

【愛・家族】 親兄弟・パートナーとの関係は？ 子どもはいる？

【学習】 学んでいること、向上させたいの
興味、関心あること、
やりたいこと

【余暇・地域】 好きなこと、
好きな時間？
どんな友達、仲間と？
やりたいこと

ワーク&ライフ・デザイン 教育プログラムについて

2020.11.10
帝京平成大学 大学院
臨床心理学研究科

馬場洋介

2.

・ワークを通して、自身のキャリアや将来について、具体的に考えることができた。仕事と家族など、一見、関連のないこと同士でも関連を持たせて考えることができるのだという、気づきにもなった。
また、ペアワークを行うことで、自分以外の人のキャリアや、将来についての価値観や考えについて触れることができた。
自分以外の人の背景にある家族と仕事、興味・関心のあることについて、どのようにして関連づけていけるか、考えるきっかけになった。

4.

・改めて、人生を見直し、今後の自分に求められる課題や、ぶつかる問題に対して、分析することができた時間、プログラムであった。
大学では難しいかもしれないが、このプログラム+αで、個人にメンターを付けて、本人の生きる道に対して、具体的に関わることができたら、より現実的で支援的なプログラムになると感じた。
また、これもカウンセリングにおいても同じことが言えるが、予め見立てを立てていることで、いざ、修正が必要になった時に、どの部分に焦点を当てればよいのが、浮き彫りになり、直接的な対応が可能になる。
それは、今後、生きていくためにも必要な地図になると感じた。

6.

・共働きの家族の動画を見て、同じ共働きでも、家族構成や子どもの特徴、それぞれの働き方によって、だいぶ違うということが分かった。
10年後の自分については、仕事、余暇の過ごし方等、様々な面からどうなっていたいか考えることで、具体的に考えることができた。
普段、このようなことはあまり考えることはないが、単に、将来、この仕事に就きたいと考えるだけでなく、自分がどのように生きたいのかは、仕事だけではなく、家庭や余暇の過ごし方も重要になってくると思うので、ライフキャリアデザインを大事だと思った。

1.

今日は「共働き」についてのイメージが大きく変わりました。
自分の今までのイメージでは、「共働き」は等しく、大変で、余裕がなく、授業資料でいうところのH家のような感じに考えていました。
しかし、M家のような例を見ると、工夫次第で、余裕やコミュニケーションをとる時間も生まれるのだなと思いました。
しかし、仕事がいつ終わって、何時に家に帰れるのかについては、工夫だけでは難しいところもあるので、職場での裁量も重要になっていると考えられました。
また、後半のワークでは、4つのカテゴリーに分けて未来設計をしましたが、グループで話し合った時に、自分はどのカテゴリーにおいても、人間関係を重視している事を気づかされました。
具体的に各カテゴリーで何ができるか、考えることは勉強になりました。何より、自分の考え方も、未来設計にかなり色濃く出ることが分かりました。

3.

・同じ共働きでも、こんなにも違うのかと今回のビデオを視聴して感じました。共働きのイメージがまだまだネガティブなものが強いのかなという印象を受けました。
私の両親も共働きで、家事も育児もすごく大変そうでしたが、お互い以外で一生懸命、働いていることを知っているからこそ、尊重できたり、多様性を認め合える関係を築くことができるというポジティブな面もあるのではないかと思います。
それによって、自身の子どもにも、ある程度の人生の自由を与えることができたり、子どもを「1人の個人」として、尊重できるのではないかと思います。
そして、全体を振り返って、やはり家庭の環境というのは、個人の人生観に大きく影響するということを改めて感じました。

5.

・2家族の動画では、同じ共働き家庭であっても、食事シーンは全く違いました。心理職が、各家庭について詳しく知り、どんな課題を抱えているかを考えなくてはならないことがとてもよく分かる動画だったと思いました。
10年後の自分では、グループで共有したことで、新たな気づきを得られ、より具体的に考えられたと感じました。

7.

・共働きの家庭2つを見てみて、「共働き」というだけで、忙しい、時間がないということになるのではなく、工夫の余地があったり、環境因子によっても、影響されるということも学んだ。
自身が将来、共働きになった際、自分のキャリアや子どもの要因など、状況をいろいろと考えた上で、家庭での時間をどう過ごすか、考えていきたいと思った。
ワークでは、とてもワクワクした気持ちを取り組めた。
色々理想が出てきて、それをムリなものだ、と誤ってしまいうだったけど、統合して考えることで、自分の将来について、まとまったような、現実的にイメージできるように感じた。
10年後が楽しみになった気がした。

8.

・今回、ワークをやってみて、ペアの人に自分の書いたものを見せながら、説明をした。愛・家族がどうしても想像できず、一応、結婚して子ども2人、4人家族といくふうを書いたが、本当のところ、結婚したいのか、独身でも良いと思っているのか、まだ分かっていない。このワークが、結婚について考える良い機会となった。

他の3つの項目に関しては、かなり具体的に書くことができた。余暇を書き出してみると、自分には意外とやりたいことがたくさんあるのだなと気づいた。

このやってみてみたいことは、生きる上でのモチベーションにもなりそうであると思った。

「学習」では、習字を習いたい、漢検1級を取得したいという向上心が自分にもあったのだな感じた。

9.

・ワークを体験し、今まで目先の目標や仕事と家庭などを別ものとして考えていたが、統合して考えることで、新たに見えてくる可能性や課題に気づくことができた。

また、仕事について考える際、こうあるべきという考えをしてしまいがちになるが、家族・余暇とからめて考えることで、ワクワクしながら先のことを考えることができた。

仕事について不安に思っていることもあったが、楽しみながら自分にやりたいことや、趣味も考えることができて、より前向きにとらえられる良い機会になった。

統合することは少し難しい面があったが、また、改めて、考え、統合できるように進め、10年後の自分について、まとめられたらと思う。

また、違う年代の人の10年後の話を書くことができたのも、聞いている側もワクワクさせられ、いい経験になった。

10.

・最近は大学院での学習と家庭生活に追われて、内省する時間がなかったので、今日、ワークを行うことで、自分の目標や希望を改めて、意識することができました。

ワークをしている間は、ワクワクして、心理面にも良い影響があると感じました。

H家とM家の動画では、育児において、夫婦2人で取り組むのか、母親が1人で取り組むかで、母親の忙しさや、他の子どもたちの様子も変わるということが、分かりました。

日本では、まだまだ家事、育児は女性がするという意識が根深くあると思うので、男性も女性も意識を変えて、協力して家庭を築いていくことができるといいなと思います。

今日のようなワークでは、色々な項目があるので、多角的に自分のビジョンに引き合せて、良かったと思います。

こうしたワークが色々な人に広まるといいなと思います。

11.

・仕事・愛や家族・学習・余暇や地域など、それぞれ単体で考えたときは、比較的悩まず書けたが、仕事×学習など、組み合わせると難しく、悩むことが多かった。

だが、そうして悩むことが、大事なこともなにかも感じました。

書いていくと、自分の譲れないものや、これからについて、よりリアルに感じる事ができたように思える。

もし、障害者の方が同じように体験をしたら、どのようなことが語られるか興味も湧いた。

また、どのような場面で、このプログラムが行われると予想されるのかという疑問も持った。

研修会とかで行うのか。

個人から要望があれば、随時、行うのか気になった。

(2) ユニット型プログラム・専門科目「ジェンダーと法」組み込み型

ジェンダー社会課題を自分のものにするために

(2) から (4) に関する【資料(抜粋)】【効果】【今後に向けて】の項については、紙幅の関係から、(4) 末尾にまとめて、記すこととする。

【実施概要】

① 成城大学法学部 3回プログラム

- ・日時 2020年5月14日(木)、5月21日(木)、7月23日(木) 9:00-10:30
- ・講義全体の2回目・3回目、最終回に実施
- ・プログラム実施担当 神奈川大学法学部 教授 井上匡子
- ・受講生 78名 (法学部3年・4年、男性47名、女性31名 氏名から推測)
- ・遠隔(Zoom、1回目同期型、2回目・3回目は非同期型)

② 神奈川大学法学部 3回プログラム

- ・日時 2020年5月18日(月)、5月25日(月)、7月27日(月) 9:00-10:40
- ・講義全体の2回目・3回目、最終回に実施
- ・プログラム実施担当 神奈川大学法学部 教授 井上匡子
- ・受講生 174名 (法学部3年・4年、男性113名、女性65名 氏名から推測)
- ・遠隔(Zoom、1回目同期型、2回目・3回目は非同期型)

【授業全体の目的と本プログラムの位置づけ】

- ・法学の世界をジェンダーの視点で捉え直すことにより、近代社会・近代法の構造を理解する。
- ・キャリアは、本講義の重要なトピックスであるとともに、ジェンダーと法の講義全体の内容やトピックスを自覚的に、自分の問題に引きつけて理解するための柱の一つである。
- ・プロセスとしてのジェンダー・多層的なキャリアをデザインする視点を理解し、アンコンシャス・バイアスの存在に気づく。

【終了後の学生のイメージ】

- ・多層的なキャリアについて、特にソーシャルキャリアについて理解する。
- ・机上の学びから、自分の生活や将来の選択の中で、課題を考えることができるようになる。
- ・自分の選択と構造の関係について理解する。

【進行】

三種類のユニットプログラム(2)(3)(4)の前半部分は、それぞれの講義の内容により多少のヴァリエーションをつけているが、基本的には同様の構成をとっている。報告書の紙幅の関係から、また説明の重複を避けるために、異なる部分のみ、※印で示した。

一回目ジェンダー論総論 1

時間	内容	備考	資料
9:00-9:10 【10分】	ジェンダー総論 1 本日の内容の確認	接続環境の確認 資料の確認	Teams/WebClass 上の Forms
9:10-9:30 【20分】	1 導入 ・現状の確認 データを用いて 社会運動として 判例の紹介 ・遠隔すごろくの実施	・何が問題かを自分の体験 の中から説明する ・二つのフェーズの区別 ・男女をめぐる状況の確認 ・ロールプレイ要素のある すごろくゲームを通じて、 ライフステージの中のジェ ンダー課題を発見する	ワーク 1 遠隔すごろくの シート

		・加えて、ジェンダー課題を法的に捉える	
9:30-9:50 【20分】	2, ジェンダー/セックス構図の意義と限界 ・ジェンダー概念の必要性と意義について、学ぶ ・二つの意義(多様性と序列化)の理解と併せて、現代的課題におけるジェンダー/セックス構図の限界についても、理解する	・二つの意義を強調しつつ、構図そのものの限界について説明する	
9:50-10:10 【20分】	3, 性の多様性と性の四相 ・ジェンダー/セックスの構図から性の四相へと展開した原因について理解する ・四つの相/要素の内容を学ぶ。 ・性的二元論構造について、理解する	・講義の中では、タレントや有名人を例にとりつつ、性の四相の内容を理解する ・性の四相の図の中で、各自の位置を確認させる	
10:20-10:40 【20分】	4, LGBTs への配慮から SOGI の視点へ LGBTs への配慮の必要性と問題点を学ぶ SOGI の視点が人権の視点であることを理解する	・SOGI の視点への転換 単なる言葉の問題ではなく、社会構想(Social Vision)や社会政策上の理念の問題であることを理解する	
10:40-10:50 【10分】	5, 課題の説明と次回の告知		

二回目 ジェンダー論総論 2

時間	内容	備考	資料
9:00-9:10 【10分】	ジェンダー総論 2 本日の内容の確認	接続環境の確認 資料の確認	Teams/WebClass 上の資料
9:10-9:30 【20分】	1, 前回の振り返り ・リアクションペーパー・課題からの質問・コメントなど	・提出された課題などから、理解の不足点や誤解をとりあげて、解説する	
※ 9:30-9:50 【20分】	(2) 2, 法的性別の決め方と性の四相 ・出生証明書と出生届 ・性の四相 (3) 2, 性別の説明ワーク ・戸籍や住民票の情報をいわずに、初対面の人に自分の性別を説明する ・その要素を性の四相のそれぞれに分類する (4) 2, 性別の説明ワーク ・戸籍や住民票の情報をいわず	<3-1> ・性の四相を法的問題の観点から捉え直す ・医療と性別の関係についても学ぶ <3-2> ・性の四相についての理解を深める ・自分の生活の中での性別情報について、自覚する ・社会制度との関係で自分の性別を考える <3-3> ・グループワークにより、意見交換することにより、	<3-2> ワークシート 事後課題 <3-3> ワークシート

	に、初対面の人に自分の性別を説明する ・その要素を性の四相のそれぞれに分類する ・グループの中で共有し、意見交換を行う	他人の意見にふれることにより、理解を深める ・ただし、各自の SOGI が明確になることの弊害を避けるために、架空の内容やアイドルやテレビタレントなどの SOGI を借りて実施する ・また、討論型ではなく、「ワールドカフェ型」のグループワーク運営を行う	
9:50-10:10 【10分】	3, 性の多様性と性別二元論の違い	・性の多様性の主張が、近代法の性別二元論への批判を前提としている点を理解する	
10:20-10:40 【30分】	4, ジェンダー構造/構造的権力としてのジェンダー	・SOGI の視点への転換 単なる言葉の問題ではなく、社会構想(Social Vision)や社会政策上の理念の問題であることを理解する	
10:40-10:50 【10分】	5, 課題の説明と次回の告知		

三回目 キャリアデザインとジェンダー

時間	内容	備考	資料
9:00-9:05 【5分】	ライフキャリアとジェンダー 本日の内容の確認	接続環境の確認 資料の確認	Teams/WebClass 上の資料
9:05-9:15 【10分】	1、講義全体の振り返り ・リアクションペーパー・課題からの質問・コメントなど	・提出された課題などから、理解の不足点や誤解をとりあげて、解説する	
9:15-9:30 【15分】	2, ライフとキャリアとデザインとは？ ・	・ワーク 1(10年後の私) ・ワーク 2 キャリアの多層性についてライフキャリアの虹に表により学ぶ	
9:30-9:55 【15分】	3, ライフキャリアとジェンダー ライフイベントとアンコンシャスバイアス ・ライフイベントの中で考える ・遠隔すごろくゲーム	・遠隔すごろくゲーム(ロールプレイ)により、ライフイベントとその中でのジェンダー課題に気づく	
9:55-10:20 【30分】	4, ライフ・イベントとワーク・ライフデザイン、そしてジェンダー ・アンコンシャス・バイアスは、どこにある？ ・他人のライフイベントでの選択を見てみよう(想像してみよう)	・ワーク 4 にわり、アンコンシャス・バイアスについて考える ・アンコンシャス・バイアスを理解するヒント 1 としての M 字カーブ問題(前々回の講義の復習を兼ねて) アンコンシャス・バイアスを理解するヒント 2 とし	

		て、神奈川県 MEET ME BOOK を利用→課題 1	
10:20-10:40 【20分】	5, 多層・多相ライフキャリアのために ・ライフ・キャリアと四領域 ・再び、10年後のなりたい私	・キャリアを四つの要素・領域に分けて考える ・「10年後の私」を四領域に展開する→課題 2	
10:40-10:50 【10分】	5, 課題の説明とコース・エッセイについて	課題 1・課題 2 の説明 コース・エッセイの説明	

【振り返り】

- ・総論 1・2 とキャリアの回が、離れているために、ジェンダー論について忘れていた学生が見られた。他方で、講義の中で扱ってきた具体的なジェンダーと法に関するトピックスについての理解を前提として講義ができるため、例えば M 字カーブ問題など、簡単に振り返るだけで進むことができた。また、自分のキャリアデザインと社会課題を結びつけることができた。
- ・ジェンダー課題をすごろくで見つけたライフイベントに沿って、展開し直すことにより、理解が進んだとの感想が多く、多くの学生から寄せられた。
- ・アンコンシャスバイアスの発見についても、具体的な例をもって説明できる学生が増えている。

【プログラムとしての特徴と改善点】

- ・講義の中では、遠隔すごろくやワークなどアクティヴ・ラーニング(AL)の要素を多用し、その上で時間外の課題に取り組みさせることで、主体的な学びを実現させることを狙いとしている。前半のジェンダー論の部分でも、AL を取り入れる工夫が必要である。今年度は、遠隔実施であったため、学生の提出物の共有が容易であった。その点は、リアル教室授業では、工夫が必要になる。
- ・今期は、最終回にキャリアに関する授業を実施したが、3-3 で実施したように、具体的な社会課題との関連の中でキャリアデザインを理解させ、全体を有機的にまとめるためには、もう少し前の段階に組み込むことも検討したい。

(3) ユニット型プログラム 2-共通教養科目組み込み型 1

個人・家族・社会・国家の関係をジェンダー視点から学ぶ

【実施概要】

① 神奈川大学共通教養科目「公共のあたらしい形をもとめて 1--ジェンダー」 / 「公共のあたらしい形をもとめて」(全学部・全学年対象科目) 3回プログラム

- ・日時 2020年5月18日(月)、5月25日(月)、7月27日(月) 10:50-12:30
- ・講義全体の2回目・3回目、最終回に実施
- ・プログラム実施担当 神奈川大学法学部 教授 井上匡子
- ・受講生 100名 (男性64名、女性36名 氏名から推測)
- ・遠隔(Zoom、同期型)

② 神奈川大学共通教養科目「公共のあたらしい形をもとめて 1--ジェンダー」 / 「公共のあたらしい形をもとめて」(全学部・全学年対象科目)

- ・日時 2020年10月5日(月)、10月12日(月)、12月14日(月)、12月21日(月) 10:50-12:30
- ・講義全体の1回目・3回目、13回目・14回目に実施
- ・プログラム実施担当 神奈川大学法学部 教授 井上匡子
- ・受講生 84名 (男性56名、女性28名 氏名から推測)
- ・遠隔(Zoom、同期型)

【授業全体の目的と本プログラムの位置づけ】

- ・本科目は、教育手法として各種のグループワークなどのアクティヴ・ラーニングを用いて展開し、ジェンダーに関係する課題を個人・家族・社会・国家などの関係をジェンダーの視点から捉え直すことにより、主体的に学ぶことを目的としている。
- ・キャリアは、トピックスの一つであるとともに、上記目的のための重要な柱のひとつである。
- ・プロセスとしてのキャリア・多層的なキャリアをデザインする視点を理解し、アンコンシャス・バイアスの存在に気づく。
- ・講義全体の内容やトピックスを自覚的に、自分の問題に引きつけて理解する。

【終了後の学生のイメージ】

- ・多層的なキャリアについて、特にソーシャルキャリアについて理解が進む。
- ・机上の学びから、自分の生活や将来の選択の中で、課題を考えることができるようになる。
- ・自分の選択と社会構造の関係について理解する。
- ・グループワークを通じて、自分の意見の表明ができるようになる。同時に異なる意見に耳を傾け、自分の意見を練り上げていくことができるようになる。

【進行】

前半部分については、講義全体の内容や到達目標によりヴァリエーションをつけているが、基本的には同様の構成をとっている。前項(3-1)を参照いただきたい。

後半 キャリアとジェンダー部分

①前期分

三回目 キャリアデザインとジェンダー 1

時間	内容	備考	資料
10:50-10:55 【5分】	ライフキャリアとジェンダー 本日の内容の確認	接続環境の確認 資料の確認	Teams/WebClass 上の資料
10:55-11:05 【10分】	1、講義全体の振り返り ・リアクションペーパー・課題からの質問・コメントなど	・提出された課題などから、理解の不足点や誤解をとりあげて、解説する	
11:05-11:20 【15分】	2、ライフとキャリアとデザインとは？	・ワーク1(10年後の私) ・ワーク2 キャリアの多層性についてライフキャリアの虹に表により学ぶ	
11:20-11:35 【15分】	3、ライフキャリアとジェンダー ライフイベントとアンコンシャスバイアス ・ライフイベントの中で考える ・遠隔すごろくゲーム	・遠隔すごろくゲーム(ロールプレイ)により、ライフイベントとその中でのジェンダー課題に気づく	
11:35-12:05 【30分】	4、ライフ・イベントとワーク・ライフデザイン、そしてジェンダー ・アンコンシャス・バイアスは、どこにある？ ・他人のライフイベントでの選択を見てみよう(想像してみよう)	・ワーク4にわり、アンコンシャス・バイアスについて考える ・アンコンシャス・バイアスを理解するヒント1としてのM字カーブ問題(前々回の講義の復習を兼ねて) アンコンシャス・バイアスを理解するヒント2とし	

		て、神奈川県 <small>の</small> MEET ME BOOK を利用→課題 1	
12:05-12:20 【15分】	5, 多層・多相ライフキャリアのために ・ライフ・キャリアと四領域 ・再び、10年後のなりたい私	・キャリアを四つの要素・領域に分けて考える ・「10年後の私」を四領域に展開する→課題 2	
12:20-12:30 【10分】	5, 課題の説明とコース・エッセイについて	課題 1・課題 2 の説明 コース・エッセイの説明	

②後期分

三回目 キャリアデザインとジェンダー 1

時間	内容	備考	資料
10:50-10:55 【5分】	ライフキャリアとジェンダー 本日の内容の確認	接続環境の確認 資料の確認	Teams/WebClass 上の資料
10:55-11:15 【20分】	1、これまでの講義の振り返りと本日の講義との関係について	・個別テーマとの関係やジェンダー総論との関係について解説する	
11:15-11:20 【5分】	2、講演者の紹介 講演「ジェンダーとキャリア：父親目線のジェンダー論」 講演者 東浩司 NPO 法人ファザーリングジャパン理事	・講演の意義について ・公開講座としての開催について	講演者レジュメ (Teams にて配布)
11:20-11:35 【15分】	3-1, 講演 1 ・不安をへらす方法 ・父親が変われば社会が変わる	・キャリアデザインと将来設計 ・不安との付き合い方	
11:35-12:05 【30分】	3-2, ・男性が育児しない・できない理由	・イクメンブーム ・クイズ ・社会課題としての少子化問題と、キャリアデザインの関係 ・男性育休問題	
12:05-12:20 【15分】	3-3 ・結婚相手に希望する条件 ・夢と感謝	・ボーリングピン理論 ・パパ検定 ・ビデオ視聴	
12:20-12:30 【10分】	4, 次回に向けて ・課題の整理 ・ワークショップ(12:40-13:30)の案内	課題 1・課題 2 の説明 コース・エッセイの説明	

四回目 キャリアデザインとジェンダー 1

時間	内容	備考	資料
----	----	----	----

10:50-10:55 【5分】	ライフキャリアとジェンダー 本日の内容の確認	接続環境の確認 資料の確認	Teams /WebC lass 上の 資料
10:55-11:05 【10分】	1、講義全体の振り返り ・東さんのご講演の振り返り ・リアクションペーパー・課題からの質問・コメントなど	・提出された課題などから、理解の不足点や誤解をとりあげて、解説する	
11:05-11:20 【15分】	2、ライフとキャリアとデザインとは？	・ワーク1(10年後の私) ・ワーク2 キャリアの多層性について ライフキャリアの虹に表により学ぶ	
11:20-11:35 【15分】	3、ライフキャリアとジェンダー ライフイベントとアンコンシャスバイアス ・ライフイベントの中で考える ・遠隔すごろくゲーム	・遠隔すごろくゲーム(ロールプレイ)により、ライフイベントとその中でのジェンダー課題に気づく	
11:35-12:05 【30分】	4、ライフ・イベントとワーク・ライフデザイン、そしてジェンダー ・アンコンシャス・バイアスは、どこにある？ ・他人のライフイベントでの選択を見てみよう(想像してみよう)	・ワーク4により、アンコンシャス・バイアスについて理解し、考える ・アンコンシャス・バイアスを理解するヒント1としてのM字カーブ問題(前々回の講義の復習を兼ねて) ・アンコンシャス・バイアスを理解するヒント2として、A・B二つの方法を紹介する A：前回の東さんのご講演の内容と重ね合わせて理解する B：神奈川県 <small>の</small> MEET ME BOOKを利用→課題1	
12:05-12:20 【15分】	5、多層・多相ライフキャリアのために ・ライフ・キャリアと四領域 ・再び、10年後のなりたい私	・キャリアを四つの要素・領域に分けて考える ・「10年後の私」を四領域に展開する→課題2	
12:20-12:30 【10分】	5、課題の説明とコース・エッセイについて	課題1・課題2の説明 コース・エッセイの説明	

【振り返り】

- ・Teamsのクラスノートブックを用い、グループワークの際の情報共有を行った。ワークの途中だけではなく、ワーク内容の保存や振り返りという点でも、効果が高かった。
- ・グループワークにおいては、対面の場合の3倍程度詳しいワークの進行のための資料を準備した。これには、メリット・デメリットの両方があったが、遠隔でのグループワークのためには必要であった。
- ・ジェンダーに関する各自の問題意識を事前課題で提示させ、それをすごろくで見つけたライフイベントに沿って、展開し直なおした。このプロセスにはかなり時間をとられてしまったが、理解が進んだとの感想が多くの学生から寄せられた。
- ・アンコンシャスバイアスの発見についても、具体的な例をもって説明できる学生が増えている。
- ・後期に関しては、東氏の講演を実施することができた。講演者が男性であることも含めて、学生たちへの訴求力が高い。前期は神奈川県のリーフレットを用いたワークで代替したが、やはり興味

の持ち方や、理解に差がでてしまった。講演を実施しない場合は、むしろ事前課題とするなど、課題の提出を受けて、もう一度講義の中で捉え直すなどの工夫が必要と感じた。

【プログラムとしての特徴と改善点】

- ・100人によるアクティブ・ラーニング手法によるプログラムである。
- ・今年度は遠隔講義に対応するため、さまざまな工夫を実施した。特に、Teamsのノートブックを用いて、それぞれが必要な資料やデータをグループ内で共有できた点は、良かった。
- ・次年度以降、対面になった場合は、それに変わる仕組みが必要になる。

(4) ユニット型プログラム-共通教養科目組み込み型 2

ライティングスキルの習得を通じたジェンダー課題への取り組みとともに

【実施概要】

神奈川大学共通教養科目「公共のあたらしい形をもとめて1--ジェンダー」/「公共のあたらしい形をもとめて」(全学部・全学年対象科目) 3回プログラム

- ・日時 2020年5月18日(月)、5月25日(月)、7月27日(月) 15:20-17:00
- ・講義全体の2回目・3回目、最終回に実施
- ・プログラム実施担当 神奈川大学法学部 教授 井上匡子
- ・受講生 30名 (男性18名、女性12名 氏名から推測)
- ・遠隔(Zoom、同期型)

【授業の中での位置づけ】

- ・本授業は、ジェンダー/セクシュアリティに関する社会課題をテーマに、ライティングスキルを身につけることを目的とし、少人数授業でいる。キャリアデザインは、ジェンダー/セクシュアリティに関する社会課題を机上の議論として、あるいは他人の問題としてではなく、自分に引きつけて理解するために、重要な柱である。今期は、同性婚の制度化をテーマに実施した。
- ・プロセスとして、多層的なキャリアをデザインする視点を理解し、アンコンシャス・バイアスの存在に気づくとともに、自らの選択が構造の一部をなしていることに気がつくことを目指す。

【終了後の学生のイメージ】

- ・多層的なキャリアについて、特にソーシャルキャリアについて理解し、具体的な社会課題(同性婚の制度化)と関係づけて理解する。
- ・机上の学びから、自分の生活や将来の選択の中で、課題を考えることができるようになる。
- ・自分の選択とアンコンシャス・バイアスや構造との関係について理解する。

【進行】

前半2回分に関しては(2)を参照のこと。

後半1回

時間	内容	備考	資料
15:20-15:25 【5分】	ライフキャリアとジェンダー 本日の内容の確認	接続環境の確認 資料の確認	Teams/WebClass 上の資料
15:25-15:35 【10分】	1、講義全体の振り返り ・リアクションペーパー・課題からの質問・コメントなど	・提出された課題などから、理解の不足点や誤解をとりあげて、解説する ・同性婚の制度化とキャリアデザインの関係について解説する	
15:35-15:50 【15分】	2、ライフとキャリアとデザインとは?	・ワーク1(10年後の私) ・ワーク2 キャリアの多層性について	

		てライフキャリアの虹に表により学ぶ	
15:50-16:15 【25分】	3, ライフキャリアとジェンダー ライフイベントとアンコンシャスバイアス ・ライフイベントの中で考える ・遠隔すごろくゲーム	・遠隔すごろくゲーム(ロールプレイ)により、ライフイベントとその中でのジェンダー課題に気づく ・同性婚制度をめぐる問題にフォーカスして説明を加え、アンコンシャスバイアスとの関係や、個人のキャリアデザインにおける選択が社会の構造に与える影響について、解説	
16:15-16:35 【20分】	4, ライフ・イベントとワーク・ライフデザイン、そしてジェンダー ・アンコンシャス・バイアスは、どこにある？ ・他人のライフイベントでの選択を見てみよう(想像してみよう)	・ワーク4にわり、アンコンシャス・バイアスについて考える ・アンコンシャス・バイアスを理解するヒント1としてのM字カーブ問題(前々回の講義の復習を兼ねて) アンコンシャス・バイアスを理解するヒント2として、神奈川県 <small>の</small> MEET ME BOOK を利用→課題1	
16:35-16:50 【15分】	5, 多層・多相ライフキャリアのために ・ライフ・キャリアと四領域 ・再び、10年後のなりたい私	・キャリアを四つの要素・領域に分けて考える ・「10年後の私」を四領域に展開する→課題2	
16:50-17:00 【10分】	5, 課題の説明とコース・エッセイについて	課題1・課題2の説明 コース・エッセイの説明	

【振り返り】

- ・総論1・2とキャリアの回の内容を同性婚制度について関連させる形で講義を進行したことにより、ジェンダー論についての理解を社会課題へ結びつけることができた。数多いライフイベントの中で、比較的関心の高いイベントにフォーカスした効果と思われる。
- ・ジェンダー課題をすごろくで見つけたライフイベントに沿って、展開し直すことにより、理解が進んだとの感想が多く、学生から寄せられた。特に、婚姻の部分に時間を使い説明したので、この点でも理解が深まった。
- ・アンコンシャスバイアスの発見についても、個人の選択との関係で説明できる学生が多かった。

【プログラムとしての特徴と改善点】

- ・講義の中では、遠隔すごろくやワークなどアクティヴ・ラーニング(AL)の要素を多用し、その上で時間外の課題に取り組みさせることで、主体的な学びを実現させることを狙いとしている。前半のジェンダー論の部分でも、ALを取り入れる工夫が必要である。今年度は、遠隔実施であったため、学生の提出物の共有が容易であった。その点は、リアル教室授業では、工夫が必要になる。
- ・ライフイベントを限定し取り上げ、理解を深めている。
- ・ライティングのスキル習得の過程(パラグラフ・ライティング/要約/賛否表の作成/ピアコリジェなど)を通して、
- ・他の授業との関係もあり、今期は最終回にキャリアを取り上げたが、13回目にしたほうが、効果的であった。つまり、「重要なライフイベントとしての婚姻制度を多角的に捉える」という形で、全体を構成し直す必要がある。

【資料(抜粋)】 (2) (3) (4) 共通

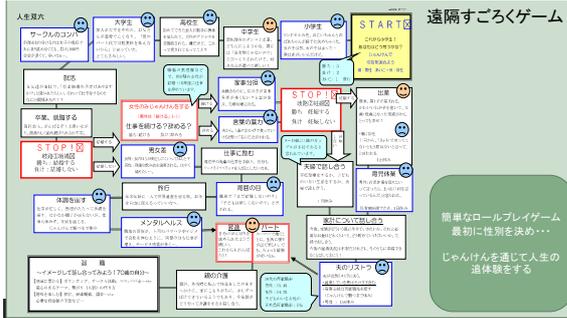
1, 何が問題か？ ジェンダー平等とは何か？

結論～ジェンダー平等とは何かを考えてほしい。
この講義では、やや抽象的・理論的に、これからのテーマに沿っては、具体的な形で。

- 平等とは・・・格差のない状態、差別のない状態
- 差別: 不合理な・恣意的な理由に基づく不利な扱い
- 格差: 人々の境遇・もっているものに差がある状態
- ジェンダー平等・・・性に関係したことがらに即して、差別がない状態をつくりだすこと
- 性に関係したことがらに即して、差がない状態を作り出すこと



先程の子供たちが、こう
なりました・・・
どうしたら、こうなります
か？



こういう事例をどう考えますか？ --2

東京医大で、長年にわたり入学試験の時に、女性受験者の点数を一律2割カット。
理由: 女子は医師に向いていないから、出産などで現場から離れる割合が高いので、女性
医師が増えると医療現場がもたない・・・など

- ① 現役男子 20点
- ② 1浪男子 20点
- ③ 2浪男子 20点
- ④ 3浪男子 20点
- ⑤ 4浪男子 20点
- ⑥ 女子 20点

東京医大女子受験生差別問題
発覚後、東医の措置を擁護、正当化する意見が多数。
その後、東京女子医大の意見や具体的なプログラムが
示される中で、風向きが変化。

参考
<https://www.buzzfeed.com/jp/seichirokuchiki/women-in-medical-world-01>

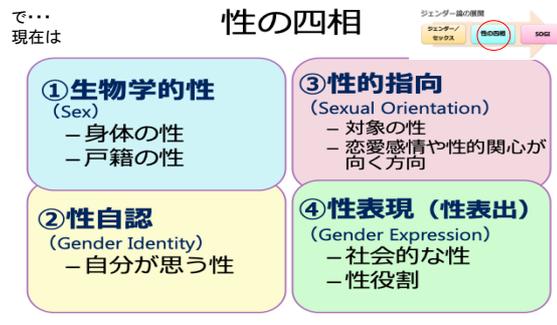
内部報告書より
これが、例えば人種や家柄、宗教、思想信条などだった
ら、どうですか？

その後、調査により同様の点数操作をしていた医大が発覚
現在、団体訴訟は原告側の勝利、個別訴訟は継続中。文科
省は、一部の医大の補助金をカット

ジェンダー/セックス図式の限界と ジェンダー論展開のきっかけ

- ① 「生物学的なレベル(セックス)」への思考停止の傾向
- ② 多様性と言っても、「男」「女」との二元的な性差は変えられないとの思い込み
- ③ セクシュアリティ概念の豊富化
- ④ 当の一義的とされてきたセックス(生物学的性差)にも、多様性・多義性があるセックスは、男と女の2つとは言えない (参照 次のスライド)

ジェンダーとセックスという図式は、この両者を対比・対立的に捉えられているからその図式だった。
だが、その対比が崩れてしまった。
⇒ セックスもジェンダーも混合した上で「性」を捉え直す。四相(フェーズ)から。



性の四相とそれぞれの多様性
 実は境界はあいまい〜グラデーション、レインボー

性\$開\$要素(2)*+4増\$連\$性\$4H%30(重要) CDE

cf. ノンバイナリージェンダー (non-binary gender)
 性別を「男性」と「女性」の二元論でとらえないこと

LGBT個別対応からSOGIに関わる人権問題へ

SOGI (Sexual Orientation, Gender Identity)
 もう一度、2つの図にもどって…
 人はだれでもなんらかのSOやGIをもっている。
 そのSOやGIの違いによって、区別(差別)してはいけない。

LGBTとSOGIのちがいは
 LGBTは、主体である「誰」に注目
 SOGIは、「何」に注目
 ex. 女性差別と性別による差別、黒人差別と人種差別

マイノリティへの配慮/対応は不要か？

マイノリティ問題からSOGIに関わる人権問題へ
 と、言うのと、違和感 or 拒否感をもつかも…
 でも、でも…この話は、
マイノリティへの配慮/対応は不要ということでは
 決していない。

SOGIに関わる人権問題に対応するためには、制度や人権、つまりシステムを、マイノリティに対応したものに**変えていく**ことは**大変重要**。

ジェンダー論の出発点(ジェンダーvsセックス)のもう一つの重要な意義…**序列化(性別役割分業と性のダブルスタンダード)**
 多様化の推進では変えられない、超えられない課題の指摘

＝固定的性別役割分業と性のダブルスタンダード
 男性と女性の間の役割とその社会的評価の「差」

1, 2つのカテゴリーの間の差
 2, カテゴリーの特徴
 生活全般から、社会の基盤までの総合的なカテゴリー、
 簡単には抜け出せない、交代が原理的に困難。
 ⇒制度からの排除

構造としての**権力・ジェンダー構造(化)**

やっかいな(笑)ジェンダー化・ジェンダー構造化のプロセス

どうやって、発見する？
 無意識なのに…
 発露のプロセスなのに…
 蓄積しているのに…

個々人の思い込み・意識
 無意識的なプロセス
 =アンコンシャス・バイアス
 ⇒この循環を支え、回すドライブ

無意識的・循環的プロセスを発見するための視点
 ジェンダーの視点

みんながなんとなく共有している
 ステレオタイプ

ジェンダー化・職業や資格へ
 ジェンダー構造化

個人的な意識・社会化(発展)のプロセスでもあり、
 かつ、
 個人を超えた構造でもある…
 しかも、蓄積している(記録される)

**アンコンシャル・バイアスを考える
 もう一つのヒント**

M字カーブ問題
 日本独特の状況
 家庭内の分業や雇用慣行とも、
 相互作用・相乗作用
 悪循環・共犯関係？
 M字カーブは、解消したのか？
 M字カーブ的働き方の落とし穴

アンコンシャスバイアスの発見・気づきのために……

他の人の人生/ライフイベントでの選択とその理由を想像する。

ワーク5 ⇒課題

前回の東先生のご講演 or 下記の資料にあるロールモデルの中から、自分が一番気に入った人、気になる人を取り上げ、自分がワーク3&4で選んだライフイベントにおける彼/彼女(ロールモデル)がどのような選択をしたかを、想像してください。驚きや疑問、ある場合には反発が、大切です。

<http://www.pref.kanagawa.jp/documents/47546/917487.pdf>

<http://www.pref.kanagawa.jp/documents/47546/2019role2.pdf>

神奈川県 ライフキャリア と検索
大学に向けたライフキャリア教育支援に行って、
◆MEET ME BOOK ロールモデル集 (vol.1, vol.2)

「ライフキャリアデザイン」により、
卒業後の4月1日にどうしう職業に就いて、進学しているか
と「ゾー」週生ではなく、将来目標(デザイン)を…
(しかも、ジェンダーの視点から……)
複層的・多層的なキャリアのデザイン

ライフとは? / キャリアとは? / デザインとは?
ひとつひとつの言葉は、それぞれ難しくありません。
でも、この3つが重なるとなぜか変な感じがしませんか?

それはもしかすると…
キャリアを仕事上のことと限定してしまっているからでは?
あるいは、一直線のキャリアを想定してしまっているのでは?



でも、キャリアって、仕事のことでは?
もつとえば、「スキル」「資質」のこと?

それは…狭義のキャリア

キャリアって…

ラテン語の「carrus (荷馬車)」

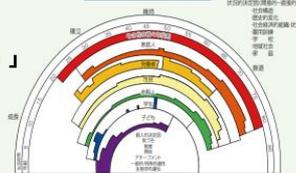
狭義のキャリアは複層的/多層的(相的)です。

仕事や職業としてのキャリア
社会の中での役割や仕事
プライベートでの役割や仕事

ライフキャリア

仕事をめぐる、職業生活、地域社会との関わり、個人の活動(自己啓発・趣味)など、生活のあらゆる場面に「キャリア」の考えが広がります。

ライフキャリアの虹



遠隔すごろくゲーム、いかがでしたか?

さて、ワーク 3
すぐろくから、ライフイベントを
見つけてください。
クラスノートブックのキャリアの項に
書き込んで、ください。
ただし、これは課題にします。

少なくとも、3つ
できれば、5つ以上

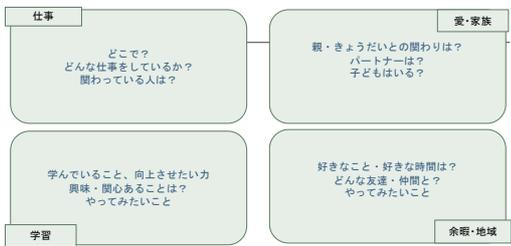
学年	1	2	3	4
キャリア				
ライフイベント				
趣味				
その他				

5、多層・多相ライフキャリアのために

キャリアを4つの要素・領域(四つ)に分けてみよう

- 仕事……どう仕事につくか
複層的なキャリアへ
- 家族……どう人と家族をつくるのか
どう暮らをするのか
- 余暇/地域……自由な時間何をするか 趣味?
自分の時間?、家族との時間?
- 学習……勉強? 生涯学習?
さらに…井上の友人の例から、この領域の重なり・相互関係を考えよう

10年後の私
ワーク&ライフデザインのための四領域



【効果・・・ジェンダー系科目にとってのキャリア視点の意義】 (2) (3) (4) 共通

・第二回目の講義と最終回の講義に、二回の質問紙調査を実施し、①ジェンダー/セクシュアリティ理解、②多層的なキャリア(ソーシャルキャリア)の理解、③アンコンシャス・バイアスの理解について、調査した。

①ジェンダー/セクシュアリティ理解

すべての科目で理解が進んでいる。

②キャリア理解

いずれの科目でも項目数が増加し、第1回目はほとんどが仕事についてのキャリアや資格に関する項目であったのに対し、最終回ではソーシャルキャリアなど複線的なキャリアについての記述や、四領域を意識した記述が増えた。プロセスとしてのキャリアデザインに関する理解が深まったことがみてとれる。

③アンコンシャス・バイアスの理解

すべての科目で理解が進んでいるが、科目ごとにばらつきが見られる。特に3-2で効果が高いのは、具体的なテーマに沿って、多角的な検討(同性婚の制度化に賛成・反対、そして批判的立場)をし、さらにそれをライティングという形で、まとめたためと思われる。3-3に関しては、リアクションペーパーでも、ソーシャルキャリアやアンコンシャス・バイアスについて言及したものが多かった。また、コースエッセイにおいても、自分のキャリアデザインと社会課題の関係について言及したものが多数みられた。

・キャリアデザイン⇒ジェンダー/セクシュアリティの視線往復を可能にするプログラムを実施できた。アンコンシャス・バイアスの意識化も、心理学と法学の統合的説明により、一定の成果を得た。

ジェンダー関連科目として、キャリアデザインの要素をユニットという形で取り入れることが、ジェンダー/セクシュアリティ理解にとっても、効果が高いことが確認された。逆向きの効果であるキャリア科目にとってのジェンダー理解の効果については、正課授業に関する成果にその分析を委ねたい。

	科目名		ジェンダー/セク シュアリティ理解	多層なキャリア 理解	アンコンシャス・ バイアス理解
3-1	ジェンダーと法(神奈川 大学法学部)	第1回	3.4	3	4.85
		最終回	2.8	2.1	2.2
	ジェンダーと法(成城大 学法学部)	第1回	3.6	3.8	4.92
		最終回	2.7	2.27	2.4
3-2	公共の新しいかたちを もとめて(前期月2)	第1回	4.2	4.4	4.86
		最終回	2.9	2.82	2.84
	公共の新しいかたちを もとめて(後期月2)	第1回	4.1	4.3	4.92
		最終回	2.8	2.3	2.27
3-3	公共の新しいかたちを もとめて(前期月4)	第1回	4.2	4.1	4.75
		最終回	2	1.93	1.92

【今後に向けて・・・成果と課題】 (2) (3) (4) 共通

〈ユニット型プログラムとプログラムの普及〉

今期のユニットプログラムは、専門科目組み込み型(3-1)、共通教養科目組み込み型1(3-2)、共通教養科目組み込み型2(3-3)の三種類を前学期・後学期あわせて五科目において実施した。

大学におけるキャリア教育の重要性については、本報告書鈴木論稿にて展開されているように、論をまたないところである。しかし一方で、専門科目の先端化と実務化、教養課程の大綱化などの影響で、本事業で提案している新しい形でのキャリア教育が、現在のカリキュラムの中で、場所を得にくいという事情もある。その中で、今回のプログラムを普及し、キャリア教育を実質的に充実していくためには、新設科目としてのキャリア科目の創設とあわせて、既存の科目の中にキャリア

教育・キャリアデザインの視点を組み込んでいくこともまた重要な普及方法であろう。したがって、今回のユニットプログラムは、昨年の実装実験を踏まえ、今年度は専門科目や教養科目への組み込みを実施できたことは、意義があると評価する。

〈既存の科目との相互補完性と相乗効果〉

組み込む先の科目には固有の教育目的があり、キャリアデザインのユニットプログラムを組み込むことにより、固有の目的の達成に障害があってはいけない。その意味では、各講義の目的とユニットプログラムの組み合わせに関して、十分な検討が必要となる。

今期のユニットプログラムでは、ジェンダー関係の科目への組み込みを実施し、上記にみるような相乗効果がみられた。ジェンダー系の科目は、テーマ自体に強い関心を持つ学生がいる一方で、やや他人事、机上の議論として捉える学生も多い。後者の学生にジェンダーの視点の重要性を理解させ、自分のこととして捉えさせるためには、「キャリア・デザイン」という切り口が、大変有用であることが実感された。

〈アンコンシャス・バイアスの低減〉

さらに、今回の事業全体の目的の一つである「アンコンシャス・バイアスの低減」に関しても、ユニットプログラムの中で、手がかりを得た。アンコンシャス・バイアスの低減のためには、まずそれを自覚することが重要であるが、そのために他人のキャリアデザインを参考に、選択の理由を考える(想像させる)ワークを実施した。他者の選択の理由を考える中で、自分の無意識(意識的でも)の選択との間の差から、自らのバイアスを発見する学生が多数みられたからである。これは、単なる制度の解説や問題点の指摘では得られない方策であった。また、3-2の後期講義ではゲスト講師による講演を組み込み、この「自分とは異なる選択の理由」を考える素材としたが、既存の科目で常にこのような講演を組み込むことが可能になるわけではない。そのため、3-1、3-2前期、3-3では、神奈川県のリフレットを用いたワークを通じて、アンコンシャス・バイアスの意識化・自覚化に効果を上げることができたのも、大きな成果であった。あるべきキャリア像を押し付けるのではなく、学生自身が問題を発見し、社会課題と関連付けて検討するための方途の一つを提示できた。

個人の意識やその結果としての個々の選択と社会制度や構造の関係については、理解が難しく、これのまで十分な効果をあげることも多かった。しかし、今回のユニットプログラムでは、「アンコンシャス・バイアスをドライブとする、個人の決定⇒ステレオタイプ⇒制度⇒個人の決定というループ」として図式化し、それを各科目の固有のテーマを具体的な素材として用いることにより、より具体的な形で理解させることができた。ユニットプログラムとして既存の講義に組み込むことの積極的なメリットである。

〈教育方法〉

教育方法にかんしても、多くの実験を行った。3-2と3-3は、もともとアクティヴ・ラーニングの手法を用いた科目であったが、今年度は遠隔講義となったこともあり、さらなる工夫を実施した。また、その成果を、従来は知識伝授型の専門科目であった3-1「ジェンダーと法」にも、応用することができた。受講生たちにも、概ね好評であった。

3-3のライティングの講義に関しては、同性婚の制度化に関して、かなり丁寧な議論を積み重ねた上で、キャリアデザインの視点でまとめる形で最終レポートを課したが、成果は現れていた。30人という履修人数を限定した科目であり、すべての科目で同様の指導は難しいが、いくつかの示唆は得られた。

〈まとめ・・・キャリアとジェンダーの視線の往復と相乗効果〉

この事業は、キャリアデザイン⇄ジェンダー/セクシュアリティの視線往復を一つの柱としている。昨年度実施の科目では、キャリアからジェンダー/セクシュアリティへの視線の以降は比較的円滑だったが、逆方向は困難が多かった。今年度は、キャリアデザインの側からのアプローチとして、上記のアンコンシャス・バイアスの自覚化などをジェンダー論の中に積極的にとり入れるなどの工夫をした。特に、3-3の講義では両者の視線の融合を試みることができ、一定の成果があった。互いの視線の往復を踏まえて、キャリア教育とジェンダー教育が互いに補う関係として、さらには相乗効果をもつものとしてプログラムを改善し、実施していきたい。

(5) ユニット型プログラム-高校向けプログラム

10年後、法曹として何をしたいですか？ という問いとともに

【実施概要】

- ・日時：2020年12月18日(金) 13:30-15:05
- ・プログラム実施担当：神奈川大学法学部井上匡子
- ・受講生：神奈川県立相模原総合高校 1年生 40名 (男性 28名、女性 12名 目視による推測)
- ・対面での実施
高校側からの要請により、大学での講義に触れるための授業として実施。
テーマは「法の世界は何色?: ジェンダーとライフキャリアの視点から」

【授業の目的】

- ・大学での専門的な授業にふれる。
- ・映画やドラマなどの身近な素材をきっかけに、法曹の特徴について理解する。
- ・法学部での学修や卒業後の将来について知る。

【終了後の学生のイメージ】

- ・法学部での学修や卒業後の進路について、一定のイメージを持つことができる。
- ・キャリアについて、複層的に理解できる。

【進行】

時間	内容の詳細	備考・留意点他	資料
13:30~13:35 【5分】	本日のプログラムの説明	・資料の確認	
13:35~13:45 【10分】	一、自己紹介	講師が法学部を選んだ理由をきっかけに、法学部の学びを紹介	
11:05~11:30 【25分】	二、法は何色? 1) テミス像を手がかりに 2) 法に携わる人と司法の役割 3) 広がる法曹の仕事 法に携わる人は、どんな人 広がる弁護士の世界	ワーク1(法は何色?) ワーク2(テミス像を使って、法の世界の特徴を考える) ワーク3(法曹のイメージ)	ワークシート1, 2, 3
11:30~12:00 【30分】	三、ライフ・キャリアデザインと法曹 : 選択肢としての法曹 1) ライフ・キャリア・デザインと複層的なキャリア ・日本女性法律家協会編『日本女性法律家協会編70周年のあゆみ』の第三部(目次を配布) 2) 10年後のわたし	・前項の法曹のイメージとの相克を意識させる ・ワーク4 自分だったら、どういう法曹(弁護士)になりたいかを書く	ワークシート4
14:55~15:05 【10分】	まとめにかえて 質問など	質問と応答	

【振り返り】

- ・法の世界の紹介・キャリアという、やや欲張りなプログラムであったため、時間が足りなく、後半は駆け足となってしまったが、受講生には概ね好評で、ワークや意見発表にも積極的であった。
- ・弁護士になりたいかどうかではなく、弁護士になって何をしたいか・・・というやや強引な問いかけではあったが、高校生たちは非常に柔軟に対応してくれていた。
- ・今後は、もう少し内容を精査した上で、実施したい。

配布資料(抜粋)



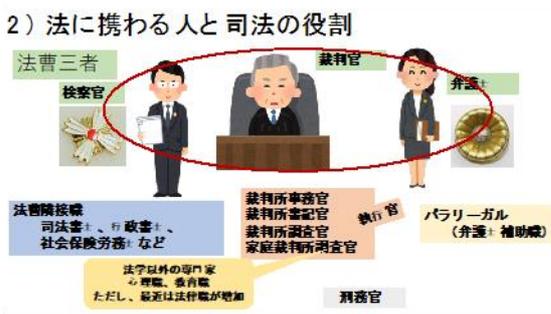
帰ってくる 再び0.1%に挑むために

共通点は？

2) 正義の女神デミス像を手がかりに




2) 法に携わる人と司法の役割



法曹三者

- 検察官
- 裁判官
- 弁護士

法曹隣接職

- 司法書士、行政書士、社会保険労務士など

裁判所事務官

- 裁判所書記官
- 裁判所調査官
- 家庭裁判所調査官

執行官

- パブリック・アディバラー
- (弁護士 補助職)

司法官

法学以外の専門家
の理解、参画
ただし、最近では件数が増加

3) ひろがる弁護士の仕事

現在、弁護士の仕事もものすごく広がっています。

参照 日本女性法律家協会編
『日本女性法律家協会70周年のあゆみ』

- 民事弁護・・・損害賠償
- 刑事弁護・・・無実の証明
- 家事事件の代理人・・・離婚、親権、養育費、養子縁組、成年後見
- 労働事件の代理人

この他に・・・



三、ライフ・キャリアデザインと法曹ワーク

唐突ですが...
皆さんが10年後、法曹になつてほしいとして、どんな法曹、弁護士になりたいか、どんなことをしたいですか？

そして、
どうしたいですか？



10年後、法曹(弁護士)として活躍している私

ワーク&ライフデザインのための4つの問い

仕事	愛・家族
どこで？ 弁護士としてどんな仕事？ 関わっている人は？	景・きょうだいとの関わりは？ パートナーは？ 子どもはいる？
学業	余暇・地域
学んでいること、向上させたい知識・関心あることは？ やってみたいこと	好きなこと・好きな趣味は？ どんな友達・仲間と？ やってみたいこと

5. 地域開催講座に向けた調査および講座開催 (NPO かながわ女性会議)

(1) M字カーブ調査および地域開催講座の目的

特定非営利活動法人かながわ女性会議は学校法人神奈川大学より再委託を受け、本事業に参画した。本事業における役割は以下の二点である。順に記す。

- ① M字カーブと女性のニーズに関する調査
- ② 地域開催講座の検討・実施

(2) ワーキンググループの実施

下記の日程と内容で、WGを開催した。但し、2月15日現在で、一部、未実施のものも含む。

	日程	参加者	内容	開催方法・場所
1	5月29日	吉田洋子・井上匡子・小林英子	今年度の事業について1 予算計画	対面・藤沢事務所
2	6月27日	吉田洋子・井上匡子・小林英子・中村真理・橋場典子・藤田笑・森勝美	今年度の事業について2 事業内容と担当について	対面・反町ふれあいサロン
3	6月29日	吉田洋子・井上匡子・橋場典子・藤田笑	M字カーブ調査について1 昨年度探索的調査報告 調査項目検討	Zoom ミーティング
4	7月20日	吉田洋子・井上匡子・橋場典子・藤田笑	M字カーブ調査について 調査項目検討・決定 調査対象者確認	Zoom ミーティング
5	8月31日	吉田洋子・井上匡子・中村真理・藤田笑	講座検討 コンセプト	Zoom ミーティング
6	9月24日	吉田洋子・井上匡子・中村真理・藤田笑・橋場典子	講座検討 内容について M字カーブ調査について 調査日程・対象者確認	Zoom ミーティング
7	10月28日	吉田洋子・井上匡子・中村真理・藤田笑・橋場典子・森勝美・小林英子	講座検討 内容について	Zoom ミーティング
8	11月23日	吉田洋子・井上匡子・橋場典子・藤田笑・大野恵理	講座検討 開催方法について、業務分担	Zoom ミーティング
9	11月11日	吉田洋子・井上匡子・森祐美子・土川(学生)	講座検討 会場下見と内容打ち合わせ1	対面・横浜市男女センター(戸塚)
10	11月17日	吉田洋子・森勝美・小林英子	講座検討 会場下見と内容打ち合わせ2	対面・かなテラス
11	11月19日	吉田洋子・井上匡子・大野恵理・塚原・高橋ひかる・菊池・学生	講座検討 会場下見と内容打ち合わせ3	対面・かなーちえ
12	11月30日	吉田洋子・井上匡子・大野恵理	講座検討 グループワーク検討・確認	Zoom ミーティング

13	12月8日	吉田洋子・井上匡子・橋場典子・大野恵理・森勝美・小林英子・森祐美子	講座振り返り	Zoom ミーティング
14	1月8日	吉田洋子・小林英子・細井佳代	事業とりまとめ	対面・藤沢事務所
15	1月26日	井上匡子・小林英子・中村真理・橋場典子・藤田笑・森勝美	報告書内容検討	Zoom ミーティング
16	2月26日	井上匡子・小林英子・中村真理・橋場典子・藤田笑・森勝美	事業取りまとめ	Zoom ミーティング

(3) M字カーブ調査

【検討】

- ・昨年度の探索的調査に基づき、質問項目などの検討
- ・聞き取り対象者とのコーディネート
- ・調査結果の分析と検討

【実施概要】

- ・実施日時
2020年3月13日、9月9日、9月17日、10月2日、10月9日、10月13日、
10月21日、10月28日、10月30日
- ・調査対象者(子育て中の女性)・・・のべ人数 12人
- ・橋場典子(成蹊大学法学部助教)をチーフとし、吉田洋子との二人体制で実施
- ・調査のコーディネイトは、吉田洋子が担当

【振り返り】

- ・家族構成や前職の種類など、ヴァリエーションに富む対象者をインタビューすることができた。
- ・調査に参加することにより、自らのキャリアを振り返り、展望する機会となったという感想を複数の対象者から得た。家族や子育てのこと以外での会話が少ないことが推測される。
- ・学生との交流への意欲を示す対象者が多かった。
- ・調査→フォーラムの参加→大学生との交流→社会課題への関心と解決に向けた参画というサイクルが複数みられた。

(4) M字カーブ調査報告書

M字カーブインタビュー調査の概要と分析

文責：橋場典子

1、調査概要

M字カーブ調査は2020年9月～10月に実施した。合計10名の子育て中の女性がインタビュー調査に応じてくださった。なお、本調査前の予備調査として、2019年度に神奈川区子育て支援拠点かなーちえのスタッフ3名、神奈川区区民活動支援センターのスタッフ1名にヒアリングを実施した。聞き取りはかながわ女性会議メンバー(吉田、橋場)で1名あたり1時間～1時間半程度で実施した。

なお、予備調査は対面で実施、本調査は新型コロナウイルス感染症対策としてZoomを介して実施した。

2、質問項目

本調査は、半構造化インタビューで実施した。
主となる質問項目は以下の通り。

- ・ 家族構成
- ・ 子ども関連の状況（子どもの人数、年齢、保育環境など）
- ・ 婚姻前後における働き方の変化の有無
- ・ 変化があった場合はその経緯
- ・ 出産前後における働き方の変化の有無
- ・ 変化があった場合はその経緯
- ・ 周囲のサポート環境について（実家・義実家、行政、友達、地域活動など）
- ・ 現在の就労状況について
- ・ 就労希望の有無とその理由について
- ・ 子育て期間中に感じていること
- ・ 地域活動との関わりについて

3、今回のインタビュー調査から見てきた傾向

①婚姻とキャリアとの関連

今回のインタビュー調査では、婚姻自体が働き方の変化に影響を与えたと答えた事例は1例に留まった。婚姻という事象単独での働き方の変化に対する影響は少ないのかもしれない。

②出産とキャリアとの関連

出産を機に働き方を変えたと答えた事例は8例であった。

妊娠・出産とキャリアとの関連について、今回のインタビュー調査からは、「妊娠・出産を機に働き方を変えた」という事象が同一でも、その背景や理由が多様化している様子が明らかになった。

例えば、妊娠・出産を機に退職を選択した事例において、「残業が多くハードな勤務実態だった」（30代後半）場合や、「職場の人間関係に悩みがあった」（30代前半）など、前提として働きにくい状況である旨が語られた。この場合、本人にもともと積極的な就労継続意識があったわけではなく、妊娠・出産が一種のトリガーとして機能した結果、渡りに船で退職を選択したという事例であると言える。

一方、「職場に愛着」があったり「仕事が好きだ」という積極的な就労継続意識があったりする者が、妊娠・出産を機に退職せざるを得ない選択をした場合には、大きな喪失感が語られた（「社会との隔絶」「孤独感」など）。

妊娠・出産を機に、退職ではなく契約社員や派遣社員など短時間勤務が可能な働き方に変えたものもいた。その中には近い将来正社員に復帰したいと望んでいる者もあり、共通する特徴としては「勤続年数が10年以上」である点、「専門性」や「個別性」が高い点である。

復職や再就職など、再度労働市場に参入しようとする際にハードルとして語られたのは、新卒ブランドの存在による給与体系への不満である。いったん労働市場から離れると、復職した際には場合によっては新卒の給与よりも低い賃金で働く場合も想定される。そうした点への心理的ジレンマが一種の諦めへとつながり、復職を希望しない（したくない）という状況を生み出している実態が浮かび上がった。

以上のことから、本人が本来持っている「意思」や「希望」と、周囲の状況を勘案した際の「判断」「選択」には、しばしば乖離が生じていることが、今回のM字カーブインタビュー調査からも観察された。

③パートナーの在り方が女性のキャリアに及ぼす影響

今回インタビューを実施した10例のすべてが、パートナーがフルタイム勤務をしていた。パートナーが多忙のため、子育てに関しては基本的に妻側が担うものとしての家庭内認識が存在していた。

具体的には、パートナーの転勤や転職に伴って居住地を変更し、それに合わせて妻側が退職したり就労形態を変えたりしている実態が語られた。また、子供がいない時期は家事を分担していたものの、出産・育児を契機に妻側が就労形態を変更、それに伴い家事・育児の分担が妻側に多く割かれるように変化するという様子も語られた。一方、パートナー（今回は夫側）の働き方は、妊娠・出産の前と後で特段の変化は見られなかった。

これらの聴き取り結果から、妊娠・出産・育児というライフイベントやパートナーの状況の変化（転職、転勤等）に応じて働き方を変える傾向にある女性側と、大きな変化が見られない男性側という構造が存在することが示唆された。

④実家との関係

今回インタビューした中で、妊娠・出産後も就労を継続できていた事例は、そのすべてにおいて実家・義実家のサポートがあった（今回の聴き取りでは4例が該当）。

一方、パートナーの転勤に伴い居住地を変えた方のインタビューからは、実家・義実家が遠方になるため就労継続を諦めたという声も聴かれた。

このことから、身近で具体的かつ安心できるサポート体制の有無が、実際の就労継続の可否を左右する大きな要素となっていることが示唆された。

⑤親世帯（実家親）の就労状況の影響

就労継続への希望を聞き取る過程で、インタビュー対象者の親（特に母親）の影響が語られる場面が複数あった。親（とくに母親）がずっと働いていたため、自分も将来働くことが「普通」だと思っていたという声や、母親が専業主婦だったから専業主婦に憧れを抱いていたというものである。

自身の両親の就労の有無や就労形態（共働き、主夫・主婦など）が、生育過程におけるロールモデルとして本人の就労意欲にある程度の影響を与えている可能性が示された。

⑥地域活動へのかかわり

今回インタビューに応じてくださった方のほとんどが、地域活動に積極的に関わっていた（インタビュー対象者を募る経緯上、地域活動に積極的な方に偏ったという側面もある）。すなわち、労働市場における「仕事」からは離れたが、子育てを通じて地域活動にかかわることを通して、社会における自身の役割を再発見したというものである。子どもを通じてそれまであまり縁のなかった地域とのかかわりが深まったという声が複数聞かれた。M字カーブは就労を軸に置かれているが、就労以外での社会への貢献という意味では地域活動の果たす役割も大きいことが語られた。

4、まとめ

以上、今回のインタビュー調査から得られた示唆について5つの観点から見てきた。

これらからは、職場の環境・体制、周囲のサポート体制の有無、本人の意識、周囲の意識という点が、女性が就労を継続するか否かという「迫られた選択」を行う際に、非常に重要な要素となってくることが示されている。

職場の環境・体制に関しては、男性の育休取得の実際の取得をめぐる環境整備が求められている。その場合、育休取得の期間も重要になると思われる（数日の取得ではなく、少なくとも数週間、あるいは数か月）。いわゆる「孤育て」にならない工夫や、男女ともにワークライフバランスが保たれるような対策が喫緊に求められている。

周囲のサポート体制の有無に関しては、インタビュー結果からは実家・義実家のサポート体制の有無に加えて、自治体の子育て支援の使いやすさ／使いにくさについての意見も聞かれた。具体的には、自治体提供の制度はあっても実際には使いにくいという声や、いわゆる保育園問題についての声もあった。

本人の意識、周囲の意識に関しては、いわゆる本人・周囲の無意識化におけるバイアス（アンコンシャス・バイアス）の存在が大きいと思われる。例えば、ライフイベントに応じて働き方を変えるのは「低賃金である」「女性」であるべきだ、子育ては女性が主として担うもの、子育てを「手伝う」、という類のものである。構造が人々の意識に内面化し、「そういうものだ」というバイアスが本人にも社会全体にも無意識に存在してしまい、その結果その構造が強化してしまうというものである。

以上、2020年度に実施したM字カーブに関するインタビュー調査の結果をまとめてきた。M字カーブの存在は、社会構造と人々の意識のアンバランスさを表しているものであると言えよう。すべての人が出来る限り幸せに暮らすためにも、今一度原理原則に立ち戻った方策が求められている。（以上）

(5) 地域開催講座の実施

【検討事項】

① 内容に関して

2016年に女性会議が実施した「Mカーブ解消へむけたアンケート」の結果も参照しつつ、現在のコロナ禍の状況も含めM字カーブ調査の結果から明らかになったリアルな状況を反映させた内容にすることを目標とし、女性会議の理事や会員、研究者や実務家との協議を重ねた。また、知識伝授型ではなく、ワークショップ型で参加者をエンパワーしうる内容をめざすこととした。

学生との交流についても、単に同じ空間にいるというだけではなく、グループワークを実施することにより、実質的な形での交流を実現する。

三拠点それぞれの担当を子育て支援の現任者にご担当いただくことにより、それぞれの特徴を活かしつつ、よりリアルな形で問題をすくい上げ、展開する。さらに今後の共同の可能性や学生との交流のための一歩とする。

② 実施の方法に関して

コロナの状況を注視しつつ、検討し、リアル三拠点+遠隔(オンライン・オンデマンド)参加によるハイフレックス型で実施した。

③ 打ち合わせの実施・検討

ハイフレックス型としたため、機材の確保や当日の運営について打ち合わせた。

【実施概要】

主催：特定非営利活動法人かながわ女性会議

共催：神奈川大学男女共同参画推進室・男女共同参画センター横浜

後援：かなテラス（神奈川県立かながわ男女共同参画センター）・

かな一ちえ（神奈川区地域子育て支援拠点）

日時：2020年12月8日10時～12時

方式：三拠点対面と遠隔参加(オンライン・オンデマンド)によるハイフレックス方式

内容：

基調講演「M字カーブを取り巻く諸問題」井上匡子（神奈川大学法学部教授）

報告 「子育て女性へのインタビューの報告」 橋場典子（成蹊大学法学部助教）
 グループワーク「子育て中だからこそ、今考えるこれからの生き方」
 コーディネータ（兼グループワークファシリテーター）
 かなテラス：手塚明美（認定NPO法人藤沢市民活動推進機構理事長）
 男女共同参画センター横浜：森祐美子（NPO法人こまちぷらす理事長）
 かなーちえ：塚原泉（神奈川県地域子育て支援拠点かなーちえ・施設長）
 グループワークファシリテーター（遠隔オンタイム参加者担当）
 大野恵理（神奈川大学法学部講師）
 橋場典子（成蹊大学法学部助教）
 司会 小林英子

【参加者数】

リアル会場参加者
 かなテラス 14名
 男女共同参画センター横浜 10名
 かなーちえ 6名
 および親子の広場参加者
 遠隔オンタイム参加者
 16名
 遠隔オンデマンド参加者
 108名
 参加者
 子育て中の女性
 大学生
 子育て支援の現任者
 関心をもつ市民

2020
12/8(火)10:00~12:00
 男女共同参画センター横浜
 かなテラス かなーちえ
 3拠点をつなぎZOOMにて開催（各定員10名）
 要申込/参加無料

● 基調講演
 「M字カーブを取り巻く諸問題」
 井上匡子（神奈川大学法学部教授）

● 報告
 子育て女性へのインタビューの報告
 橋場典子（成蹊大学法学部助教）

● グループワーク
 「子育て中だからこそ、今考えるこれからの生き方」

いいきいきと生活するたためにに
 小小ささなな子子どももを持持つつ女女性性が

今回のフォーラムでは、小さな子どもをもつ女性たちが、生き生きとした生活を営む知恵を皆で話し合います。コロナ禍での不安や悩みもふきとばしましょう！当日は学生も参加し、世代を超えての意見交換を予定しています。

申し込み方法
 11/27(金)までに氏名・所属・参加会場・連絡先をご記入の上FAXかメールでお申し込みください。
 主催・申し込み：NPO法人かながわ女性会議
 〒251-0054 藤沢市朝日町4-15 DMニューライフ湘南205号室
 FAX 044-945-7174(小林) info@kanagawa-josei-kaigi.org
 共催：神奈川大学男女共同参画推進室・男女共同参画センター横浜
 後援：かなテラス(神奈川県立かながわ男女共同参画センター)・かなーちえ(神奈川県地域子育て支援拠点)

【成果】

①三拠点開催による開催による成果

地域性・家族構成などを異にする人との出会いがあり、幅広い成果につながった。グループワークでは、三拠点や遠隔参加のそれぞれの違いを反映した内容・発表となった。

②学生との交流

年代・世代を超えた交流が実現できた。学生にも子育て中の女性にとっても、良い機会を提供できた。就職を控えた学生たちは、素直に今の悩みを質問していた。また、子供を傍らに会に参加している様子を目の当たりにして、「いきいきと生活する」ということを具体的に実感できたという感想が寄せられた。子育て中の女性からは、「学生と話すことで、自分の状況を整理し展望することができた」との感想いただいた。



③ハイフレックス型の開催

遠隔での参加を実施したことにより、参加者の数は格段に増えた。また、オンデマンドによる視聴により複数回の閲覧が可能になった。

④社会参画や学びの場の提供

子育て中の女性のなかから、大学の授業(公開講座)へ参加があった。また、本 NPO の活動への参加者もあった。参加者にとっては、自分の悩みが、社会課題と結びつくことの発見と、その解決に向けて一歩を踏み出すきっかけとなった。

⑤地域で活躍する NPO などとの出会い

今回は、三拠点のコーディネイトとグループワークのファシリテーターを地域で活躍する NPO などの皆さんにお願いした。お三方ともに、素晴らしいファシリテーターであった。また参加者にとっては、子育て支援の団体や拠点と出会う機会を提供できた。学生にとっては、

子育て支援という活動の豊富さ・幅の広さを実感する良い機会となった。女性会議としても、今後の連携・共働をすすめたい。

【今後に向けて：地域開催講座の意義】

①子育て中の女性と大学生との交流の意義

単なる講演できなく、グループワークを組み合わせたことから、互いに質問し、教え合う交流が実現し、しかもそれが両者にとって、非常に有意義であることが確認された。今後は、その幅を広げていきたい。

②社会人の学びなおしの場としての大学の役割の再認識

また、今回の講座が神奈川大学の再委託事業であること、神奈川大学の講義(公開講座)に紐付けられていたことから、社会人が学ぶ場としての大学・大学院がもつ意義が再認識されることになった。リカレント教育の重要性が主張されて久しいが、大学の教育が市民社会に広がっていくことによって、大学という学びの場の多様性が保たれ、若い年代の学生たちにも良い影響を与える。地域開催講座は、このような大学の役割を照射していた。

③グループワークという手法の可能性

子育て中の女性と大学生たちの交流を実質的なものとするために、グループワークを行った。このような手法は、地域活動・市民活動や人権団体や行政と市民との共同の現場で培われてきたものである。現在、大学はアクティブ・ラーニングとしてこれを積極的にとりいれようとしている。今回は、子育て中の女性と学生という、状況の異なる者どおしではあったが、コーディネイター/ファシリテーターの力量の高さもあり、どの会場(含 サイバー)大変活発にワークが進み、最後には、グループ発表を実施することができた。

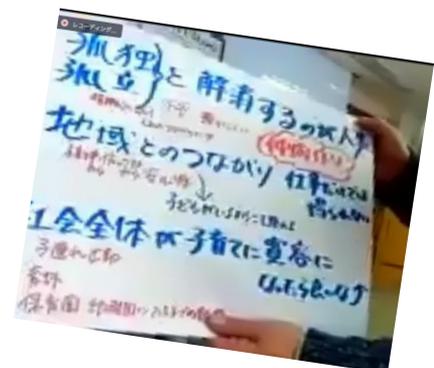
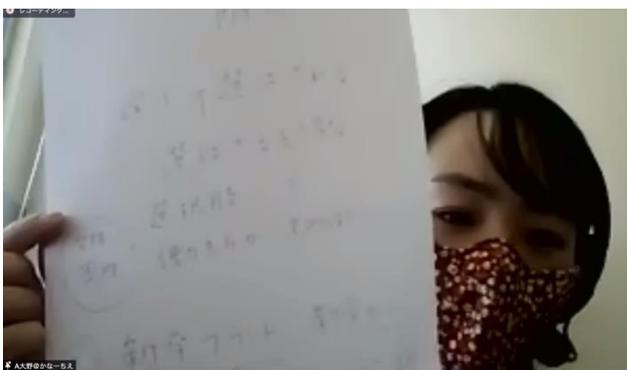
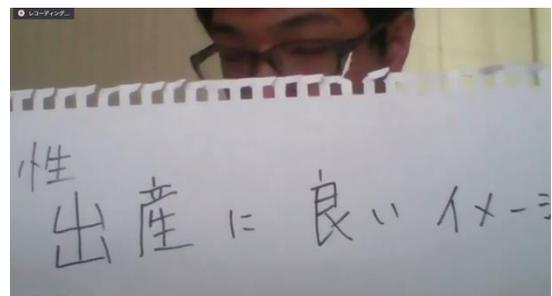
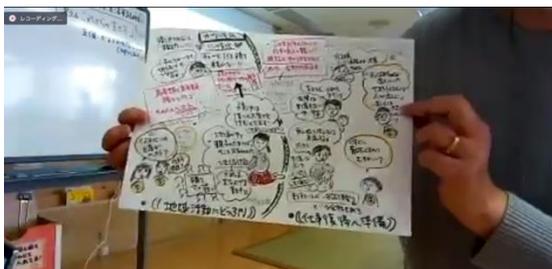
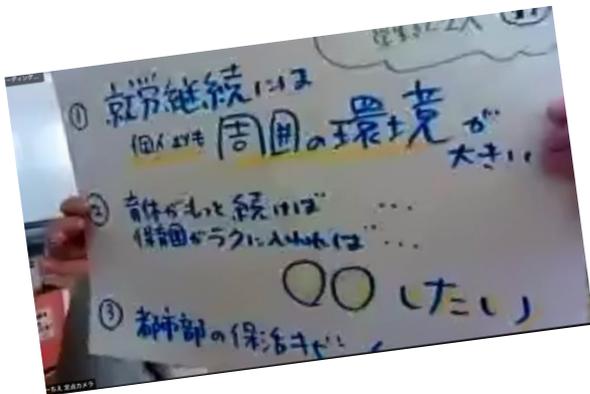
④地域の公民館などへの出講や教材の提供

女性会議が実施した 2016 年の調査時に作成した教材の改定をすすめ、地域の公民館などの高度として提供したい。

⑤遠隔の難しさと可能性

今回のハイフレックス開催の経験をもとに、大学生と社会人との交流を積極的にすすめていきたい。

グループワークの様子と成果発表



基調報告資料(抜粋)

フォーラム
小さな子どもを持つ女性がいきいきと生活するために

M字カーブ問題を「キャリアデザイン」の観点から考える

2020年12月10日開催

井上 匡子
神奈川大学准教授
かながわ女性会議副理事長



目次

- はじめに
- M字カーブとは / M字カーブの現状・・・全国/神奈川県
- キャリア・デザインとM字カーブ問題
 - 多層的なキャリア
 - ソーシャルキャリア
 - 地域の可能性
 - 顕示と顕ばされるの隔(はざま)で・・・
- まとめに代えて
コロナ禍でのライフとワーク



1, はじめに

自己紹介と今回の企画の狙い

企画趣旨

M字カーブ問題をキャリア・デザインの観点から捉え直す

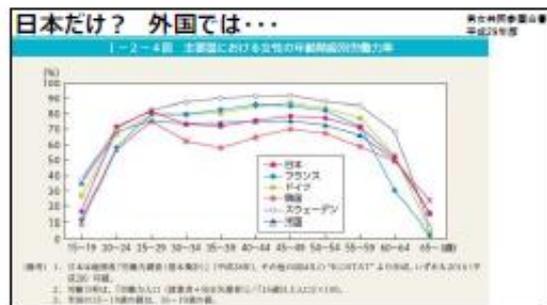
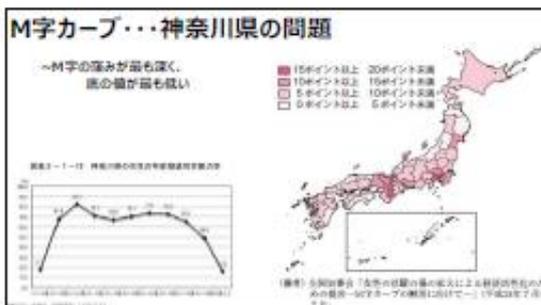
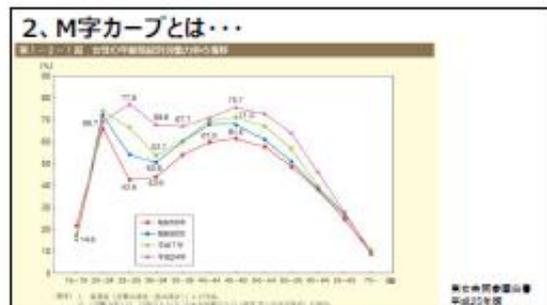
そして、それを同世代と、それから世代間でシェアする

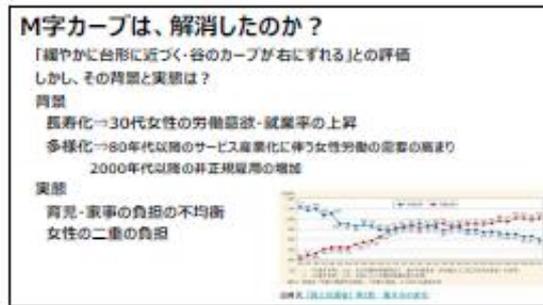
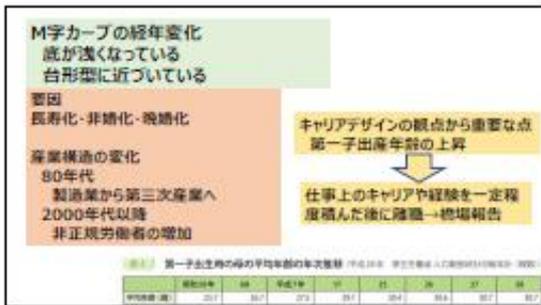
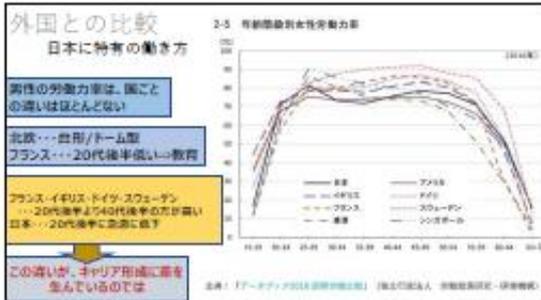
今日だけではない、これからの課題を契機に

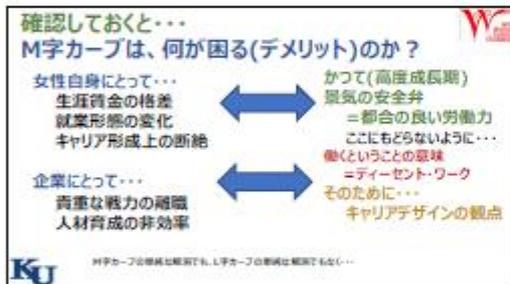
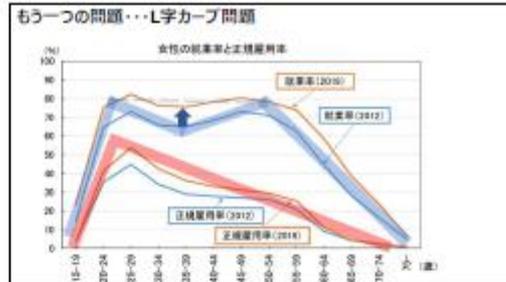
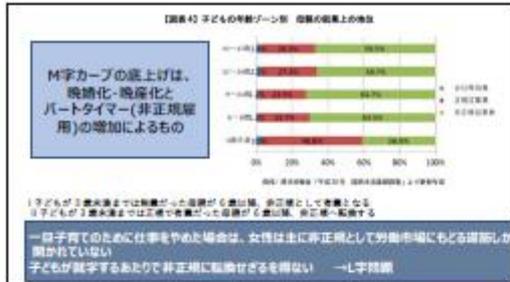
井上 匡子

- 26歳 大学院生(修士) (既婚) (2歳児)
- 27歳 第一子出産
- 28歳 夫が経営者の専業主婦に
- 31歳 専業主婦の経験
- 33歳 再就職
- 35歳-36歳 母子と二人で再就職
- 38歳-42歳 専業主婦
- 43歳-44歳 母子と二人再就職
- 46歳-54歳 母子と夫の再就職と二人再就職
- 54歳-56歳 一人再就職
- 56歳- 夫と再就職と二人再就職

現在、60歳
学生、非常勤講師、講師、非常勤講師





M字カーブ問題の解消でも、L字カーブ問題の解消でもなく

自分自身の
ライフ・キャリアデザインを!!!

では・・・ライフ・キャリアデザイン・・・って？

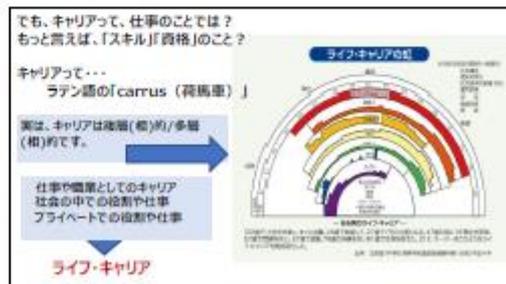
3. キャリア・デザインとM字/L字カーブ問題

ディーセント・ワーク・・・人間らしい、働きがいのある労働(仕事)
ILO(国際労働機関)や、国連のSDGsの中でも・・・
これを具体化するために、「キャリア」という言葉を見直そう～
一過性の/一直線型のキャリア形成ではなく
キャリア・デザイン / ライフ・キャリアデザイン

ライフとは？ / キャリアとは？ / デザインとは？
ひとつひとつの言葉は、それぞれ難しくありません。
でも、この3つが重なるとなんだか不安を感じませんか？

それは、もしかすると・・・
キャリアを仕事上のことに限定してしまっているからでは？
あるいは、一直線型のキャリアを想定してしまっているのでは？

KU



と、考えると・・・

ワーク・ライフバランスも、50 : 50
が理想ではない

時期によって、違いがあってもよい。
子どもが小さいうち、介護が大変な時期
自分やパートナーの体調・体力
社会情勢など

重要なのは、それぞれのライフイベントで、
どうやって、選択するか

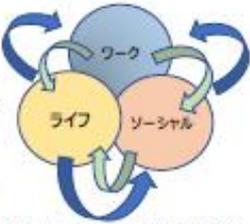


あるいは、100プラス100(シロ
キヤリア)という
スーパーウーマン(バリキャリア)は？

特に大切なのは・・・

ソーシャルキャリア
自分を確認する場として
他者とのつながりの場
自分のためであり、かつ他者の
ためでもある場として

ソーシャルキャリアとしての地域の
可能性



ライフとソーシャルとワークとの、好循環
家庭と仕事と地域の好循環

ライフ・キャリアデザインのもう一つの特徴
プロセスとしてのキャリア
ライフイベントの中での選択の問題として考える

大きなライフイベント・・・出産
その他にも、パートナーの転勤

選ばざるを得ないのではなく、選ぶ
自覚的に？ 自律的に？ 自立的に？ 選択する？
うーん・・・ とう言われると
個人的には、胸が痛いです。

選ばされる・・・は避けたい
でも、実際は・・・「選ぶ」と「選ばされる」の中間
「選ばざるを得ない」にあるのでは？

「選ばざるを得ない」と
「何かを諦める」
を、どう捉えていくか・・・

ライフイベントでの選択とアンコンシャス・バイアス、そしてジェンダー構造
出産や転勤などのライフ・イベントの意味
選ぶこと(選ばざるを得ないこと)や諦めることの意味転換

updateされるキャリアプロセス→キャリアデザイン

ワンオペ・単身赴任・転勤 などなど

新しい場所でひらいていく
外とつながる・・・インターネット
支援の仕組みへのアクセス

自分を確認する場として
他者とのつながりの場
自分のためであり、かつ他者の
ためでもある場として

ここでも、超重要なのは、ソーシャル・キャリアでは？

4. まとめて代えて・・・ 話せなかったこと

① コロナ禍でのワークとライフ
テレワークと在宅勤務の区別
中間オフィスの提案 他

② それでもやっぱり大切な経済的基盤

ソーシャル・キャリアのためにも・・・
そして、皆さんの後ろにいるこの場にいることのできない人たちと
出会うために、一緒にキャリアをデザインするために

ありがとうございました

井上匡子

おまけ・・・
参考として、省略した部分について・・・
12月14日、21日の公開講座にて実施します。
ご興味のある方は、ご連絡ください。



調査報告資料

子育て中の女性へのインタビュー調査報告

成蹊大学法学部助教 橋場典子
(NPO法人かながわ女性会議理事)
2020年12月8日 (火)

調査の概要

- ・2020年9月～10月末にかけて、10名の子育て中の女性にインタビュー調査
- ・その予備調査として、2019年度に神奈川県子育て支援拠点かなーちえのスタッフ2名、神奈川県民活動支援センターのスタッフ1名にヒアリングを実施
- ・聴き取りはすべて吉田洋子 (NPO法人かながわ女性会議理事長) と橋場の2人が実施した
(※2020年度はZoomによる聴き取り)

聴き取り内容

- ・家族構成
- ・子ども関連の状況 (子どもの人数、年齢、保育環境など)
- ・**婚姻前後**における働き方の変化の有無について (変化があった場合はその経緯)
- ・**出産前後**における働き方の変化の有無について (変化があった場合はその経緯)
- ・**現在の就労状況**について
- ・**就労希望**とその理由について
- ・**地域活動**とのかかわりについて

今回のインタビュー調査から見てきた5つの傾向

- ① **婚姻**とキャリアとの関連
- ② **出産**とキャリアとの関連
- ③ **パートナー**とキャリアとの関連
- ④ **実家**とキャリアとの関連
- ⑤ **地域活動**へのかかわり

見えてきた傾向① 婚姻とキャリア

- ・婚姻のみにより働き方を変えた事例 (1例)
- 婚姻による働き方への影響は少ない傾向

見えてきた傾向② 出産とキャリア

- ・一方、妊娠・出産を機に働き方を変えた事例は8例
 - ・ハードな仕事、職場環境→「継続は無理かも」
- 出産は女性のキャリアに大きなインパクトを与えている傾向**

具体的には—

- ・「勤続年数」「専門性・個性」「仕事のハードさ」と就労継続との関連
- ・働き方の変化
- ・労働市場に戻りたくない理由 (新卒ブランドの存在)
- ・行政サービスの使いにくさ (居住地域にもよる)

見えてきた傾向③
パートナーとの関係

- ・10件の聴き取り事例はすべて**パートナーがフルタイム**
- ・**パートナーの多忙、無理解**
- **パートナーの仕事の変化（転勤など）に女性が合わせている傾向**
- 特に出産後は育児が女性側に任せられがち
- ※ **ライフイベントに応じて、「働き方を変える」傾向にある女性**
- ※ 「傾向にある」と「選んでいる／選ばれている」との違い
- ※ 一方、パートナー（今回は夫）側の働き方には大きな変化は見られなかった

見えてきた傾向④
実家との関係

- ・近くに実家あるいは義実家がある場合、就労継続が可能になる傾向（今回の聴き取りでは4件）
- **身近なサポート体制の有無が就労継続に与える影響**
- ・**親世代（実家親）の就労状況の影響も？**
（共働きの場合、専業主婦・主夫の場合、ロールモデル）

見えてきた傾向⑤
地域活動へのかわり

- ・ライフイベントによる働き方の変化に伴い、**地域活動**に関わり始めた方も
- ※ それぞれのキャリアを活かした関わり方も
- 「仕事」以外の居場所づくりの重要性
- 社会における**役割の再発見**
- 子どもの個性に応じた地域とのつながりも

キャリア形成に影響を与えている要因

- 職場の環境、体制
- 周囲のサポート体制の有無
- 本人の意識
- 周囲の意識

小さな子どもを持つ女性がいきいきと生活するために

- ・ **働き方の多様性（在宅ワークも）**
- ・ **しなやかに状況の変化に対応している様子**
- ・ 一方、「選ぶ」と「選ばれる」との違い（井上先生御講演より）
- ・ **地域活動も多様な選択肢の一つ**

6, 地域連携に向けた取組（横浜市・神奈川県との連携）

（1）横浜市との連携

本学では横浜市との連携の一環として、2016年度よりよこはまグッドバランス(GB)賞認定企業とのイベントを実施してきた。よこはま GB 賞は、女性の活躍やワークライフバランスを推進するため、男女がともに働きやすい職場環境づくりを積極的に進める市内中小企業等（従業員 300 人以下）を横浜市が認定するものである。

本学では就職課が中心となり年 3 回程度、就職関連の企業合同説明会や交流会等を実施してきた。また昨年度は本事業の一環として、認定企業から講師を派遣していただき講演を 2 回実施し、正課外で行ったインターンの事前研修の講師も務めていただいた。また企業と学生との交流会において、学生がインターンの体験の報告を行い、本事業の取り組みを紹介するなどを行った。

（詳細は昨年度報告書参照）

しかし今年度は、コロナウィルス感染症の影響により、イベントを開催することが困難となった。そこで本授業内の講演会（授業第 3 回の社会人ヒアリング）へ講師を派遣して頂くかたちをとった。講師として、GB 賞認定企業のうち㈱ダッドウェイより脇谷佳代氏に参加して頂いた。授業では、他 2 名計 3 名の講師を招き、それぞれの講話を伺ったあと、グループに分かれて交流を行った。3 名の講師を招いたのは、オンラインで実施することもあり、学生たちがより身近にコミュニケーションをとれること、また多様な大人・キャリアに触れる形が望ましいと考えたためである。

講師を務めた脇谷佳代氏は、入社 1 年目、本学卒業生でもある。過去にスリール(株)のインターンを行い、かつ本学で実施した GB 賞のイベントを契機に㈱ダッドウェイに就職をしている。学生にとって身近な先輩として、大学生活や就職活動、会社での現在について語っていただいた。また特に印象的だったのは「ワークライフバランスを大切にする企業は、育児期の社員にとってメリットがあるだけでなく、すべての社員がプライベートも大切にしつつ楽しんで仕事をし、生き生きとすることが入社して実感できた」と語っていた点である。終了後、学生からは「よこはま GB 賞という賞およびワークライフバランスに配慮した企業があることを授業を通して知り、家族を大切にできる職場とはどのような職場か、関心を持つようになった」といった感想がみられている（詳細は実施報告参照）。

（2）神奈川県との連携

神奈川県からは、プログラムの中で使用する教材を使用させて頂いた。神奈川県では、2015 年度ごろよりライフキャリア教育支援を開始し、これまでに中学校・高等学校・大学向けの啓発冊子、授業案や視聴覚教材の作成、出前講座等を実施している。本学もこれに協力させて頂いてきたこれまでの経緯をふまえ、本事業では、大学の授業の副読本として作成された冊子を本授業において教材として使用させて頂いた。

神奈川県 大学向けライフキャリア教育支援

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/fz3/cnt/f532110/uni.html>

「MEET ME BOOK データ編」

<https://www.pref.kanagawa.jp/documents/47546/meetmebookde-ta202003.pdf>

「MEET ME BOOK ロールモデル編」 (vol. 1)

<https://www.pref.kanagawa.jp/documents/47546/917487.pdf>

「MEET ME BOOK ロールモデル編」 (vol. 2)

<https://www.pref.kanagawa.jp/documents/47546/2019role2.pdf>

本授業では、冊子を使用し、「多様な働き方ー「MEET ME BOOK」から考える「なりたい姿と今できる一歩」の準備ー」と称するオンデマンド教材として開発した。「他者のキャリアから学ぶ」ことをねらいとし、冊子にあるロールモデルの生き方・働き方を、本事業で開発した「4領域」シートに落とし込み、キャリアを分析するものである（実施報告「課題1」参照）。

また、神奈川県では今年度「SDG s アクションフェスティバル(仮称)」を企画しており、ここに学生たちが参加し、本プログラムの普及をねらいとした発表等を行う予定であった。しかしコロナ感染症流行の影響によりイベントの開催方式が変更となり、機会の実現はかなわなかった。

7. 地域連携による交流・発信（かながわユースフォーラム）

(1) かながわユースフォーラムの概要

- ・日時 2020年7月18日土 13時30分～16時
- ・主催 かながわユースフォーラム実行委員会
- ・対象 ボランティアに関心のある若者（大学生・高校生）
- ・方法 ZOOMによるオンライン開催
- ・参加者 141名
- ・構成 全体会、6分科会（①子どもとの接し方、②多文化共生、③ジェンダー、④災害、⑤世代間交流、⑥スポーツ）

かながわユースフォーラムは、学生（大学生・高校生）が主体となり企画・運営を行う社会参画型交流イベントである。当イベントの実行委員長は齋藤ゆか人間科学部教授、本事業の実行委員でもある。イベントのコンセプトを「若者自らが、一歩踏み出すひろがる未来」とし、以下のような地域のニーズに応えるものとして企画された。

- ①ボランティアには興味があるが参加する若者が少ない
- ②活動の支え手が高齢化・固定化し、「若者の力が欲しい」に応えたい
- ③年齢や国籍をこえた出会いと新しい経験がしたいが機会が少ない
- ④若者が求める情報をもっと欲しい

以上を感じている若者とともに「若者によるまちづくり」を行うきっかけづくりとして行われたものである。

この分科会の1つ、ジェンダー分科会は本事業との連携企画として実施された。分科会では、本事業実行委員井上匡子法学部教授の講話に次いで、ジェンダーの多様性、LGBTなどをテーマにディスカッションが行われた。学生たちが大学から地域に出て、多様な個性、生き方をたがいに理解し、尊重しあう地域づくりに向けて交流を深める機会となった。

今回の企画は、本事業が目的の一つとして掲げている「男女共同参画における地域連携のモデルづくり」の一つと位置づけられる。個人がそれぞれの個性を發揮し認め合える環境・地域づくりについて、学生たちが地域の多様な人々と交流しながら体験的に学ぶ意義を確認する機会となった。また、オンライン開催というかたちになったが、全体で140名あまりの参加者が時に全体で、時に分科会形式で集まり、スムーズな進行のなかで活発な議論が交わすことが出来た。



IV. 本事業の成果

1. 大学のキャリア教育

(1) キャリア教育をめぐる動向

近年は、多くの大学で様々なスタイルのキャリア教育が実施されている。そこでは、従来の就職活動に連なるものから、今後の生き方を考えるものまで幅広い内容が扱われており、実施形態も単発の講座から正課の講義まで多岐にわたっている。こうしたキャリア教育の現状を踏まえて、本章では、「神大ワーク&ライフデザイン教育プログラム」事業の成果を検討するにあたり、大学におけるキャリア教育の状況を概観しつつ、プログラムの意義を検討していく。

日本で「キャリア教育」が注目されるようになったのは、2000年代以降のことである。その背景には、1990年代後半に日本の経済や社会、雇用情勢などが大きく変化したことにより、若者のフリーターや無業者、早期離職など若年層の雇用問題が深刻化して対応が求められ、政府による政策が数多く展開されるようになったことがあげられる。

「キャリア教育」の広がりや、政策による影響が大きい。1999年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において、学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るため、小学校段階から発達段階に応じたキャリア教育の必要性が提言されたことが契機となり、様々な調査や検討、施策が実施されるようになっていった。2002年には国立教育政策研究所による「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」、2003年には省庁横断的な「若者自立・挑戦戦略会議」（構成員：内閣官房長官、文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣）による「若者自立・挑戦プラン」、2004年にはキャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（文部科学省設置）による「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」などが出されている。また、この間には、職場体験（インターンシップ）など文部科学省のキャリア教育推進施策のほか、厚生労働省の「キャリア探索プログラム」、経済産業省の「起業家教育促進事業」なども、キャリア教育の一環として組み込まれたり、経済産業省が「社会人基礎力」を提唱（2006年）したりするなど、具体的施策も始まっている。若者自立・挑戦戦略会議においても、各省が連携して実行する「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」（2004年）が策定された。

さらに、法律の改正も行われた。2006年に「教育基本法」の改正により、教育目標の一部として「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」が位置付けられたほか、2007年改正の「学校教育法」においても、同様に義務教育の目標の一つとして規定され、学校教育の中でキャリア教育を実践する法的根拠が整えられることになった。そして、2008年には「教育振興基本計画」が閣議決定された。

一方、2011年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において、キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義される。そして、幼児期の教育から高等教育までを通して、社会的・職業的自立に向けて必要な能力として「基礎的・汎用的能力」を示し、これをキャリア教育の中心として育成することが提起されている。なお、キャリア教育で育成する「基礎的・汎用的能力」とは、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」を指している。

このようにキャリア教育をめぐる政策が広く展開されるなか、大学教育にも大きな変化が生じることになった。2010年の「大学設置基準及び短期大学設置基準」改正により、大学・短期大学にお

ける「キャリア教育」が法制化され（2011年4月施行）、大学の職業指導（キャリアガイダンス）が義務化されるようになったのである。また、優れた取り組みを選んで支援する文部科学省のGP（Good Practice）事業など競争的資金の導入も、大学のキャリア教育を推し進めることになった。社会環境の変化に対応した政策が、全国の大学にキャリア教育を導入、普及させる役割を果たしたといえよう。もっとも、政策のほかにも、社会の雇用情勢をはじめ、大学生としての基礎学力が十分でない学生の増加、大学評価につながる就職実績の向上のためのキャリア教育活用など、社会の状況と大学側の事情が影響している面もあるだろう。

（2）ライフキャリアの視点によるキャリア教育

現在、大学で実施されている「キャリア教育」は、各大学の特性や実情に即したものとなっている。その様子は、先行研究や各大学のWEBサイトなどからもうかがえる。しかしながら、それらの「キャリア教育」は、就職を念頭においた職業キャリアに関する内容、すなわち組織の中で効果的・効率的に行動できる力とされる「社会人基礎力」の育成や「就業力」の向上を目指すことに重きがおかれている場合が少なくない。もちろん、大学が学生の就職や就業を支援することには意義があり、否定されることではないだろう。他方、人生の期間が長くなり、社会の在り方も急速に変化する近年の状況を踏まえると、就職という短期的な視点による職業キャリアに注目した教育のほか、社会的・職業的な自立をキャリア教育の本質として捉え、長期的視点から多面的に生き方を学んでいくキャリア教育も必要とされているのではないだろうか。

その一つに、本事業で扱うライフキャリアの視点によるキャリア教育がある。正課プログラムで紹介されているように、ライフキャリアは、職業としての仕事（ワーク）、家庭生活、地域・個人の生活などを含む生活全体（ライフ）を人生という長い時間軸のなかで捉えて、様々な役割や経験を積み重ねていくことを指している。それは必ずしも自分の思い通りにいくとは限らず、想定外の出来事や時々の社会情勢、将来の変化など、自分の力ではどうすることもできない影響も及ぶ。そのため、ライフキャリア教育においては様々なアプローチがなされている。本事業では、自治体や企業、地域のNPOなどと連携しながら、仕事で求められる役割や能力以外の部分にも焦点を当て、家庭・地域・個人的活動など4つの領域における役割や経験などについて学び、実際に体験（実習）を行うことにより、学生の理解がより深まるように工夫を重ねている。こうした取り組みを通じて、学生の自己理解が促されたり、他者の考え方を知ることによって自身の視野が広がったり、コミュニケーションの必要性からその力が向上したりしている。また、学年や性別などにより、学生の思考に幅があるものの、自身の将来の方向性を確認してそれを言語化し、実現に向けて現在行うべきことに結び付けている点は、ライフキャリア教育の成果と考えられる。

こうしたライフキャリア教育について、荻野（2019）は次のようにその方向性を提示している。「一生涯を見通す時間軸、職業・家庭・地域など社会における諸領域における役割の理解、そして直近の進路選択や社会生活における諸課題への具体的対応から、「生き方」や「自己実現」といったより抽象的課題を理解し統合的に捉える力が求められる。またそれを支える自己・他者理解、現代社会を理解し、働き・学ぶ姿勢を培うための幅広いテーマに関心が向けられている。大切なことは、子どもたちが今送る日々の学習や生活が、自分の将来や社会へと連続的につながり発達発展していくという感覚を実感として感じられることであろう。」（p. 25）

荻野（2019）からも分かるように、ライフキャリア教育はライフイベントの影響を受ける女性のみが対象となるものではない。それは、性別にかかわらず全ての学生が、大学卒業後の個人に関わる様々な問題に対応しながら、自らのキャリアを自律的に築いていく力を育むことにつながり得るものである。学生時代とは大きく異なる社会人としての生活、仕事、地域や個人の活動との関わりについて、他者との意見交換や実際の関わり（講話、実習など）を交えて多面的に学ぶことには、学生の視野を広げて思考を深める効果があった。今後、女子大学のほか、共学大学の男子学生にも

ライフキャリア教育の機会が広がることは、学生個人のキャリア形成（ミクロな視点）と日本社会の変化（マクロな視点）という2つの側面において、意義のある取り組みといえよう。

共学大学でライフキャリア教育を担当した鈴木（2019）によると、例年、受講生の半数以上は男子学生であり、性別、国籍、専攻などの違いにかかわらず、講義を通じて自身の将来の方向性を意識するようになる傾向がみられたという。また、ライフキャリア教育のアウトリーチ活動として開催した大学の公開講座では幅広い年代の男女受講者が参加するなど、ライフキャリアは地域の方々の関心にも沿う今日的なテーマであること、行政や企業、NPO法人など地域との連携事業にも寄与することが示されている。これらの点は、本事業においても成果として確認することができる。今後も、ライフキャリア教育が大学と社会をつなぐ役割を果たして、一人ひとりの男女学生の自律的なキャリア形成に資するとともに、地域と大学の連携強化に寄与することが期待される。

(3) 大学教育におけるキャリア教育の位置づけ

大学設置基準の改正を受けて、多くの大学でキャリア教育が設置されるようになった。大学には「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」を育成する体制を整備することが求められている。2011年の施行から年数を重ね、近年ではキャリア教育に関する研究が進むとともに、大学における取り組みも各校の方針や特長などに応じて、様々な形で展開されるようになってきている。

キャリア関連の取り組みとして、まず、大学の就職課が主体となるキャリアセンターなどによるキャリア支援があげられる。そこには職員やキャリア支援経験のある専門家などが配置され、就職活動を行う学生に対して実践に即した指導や助言、各種セミナーなどの支援が提供されている。

そうした従来からの取り組みが行われる一方、教育課程（教養科目、専門科目）のなかにも「キャリア教育」が位置づけられるようになった。例えば、教養科目のキャリア教育では、全学部生を対象に“やりたいこと”や“自己理解”などに重きを置く内容から、就職活動や就職を控えた学生向けに“キャリア形成”などの卒業後を見据えた内容まで、多岐にわたる講義が実施されている。それに対して専門科目では、就職先で担う仕事に関係する修得しておくべき知識を学ぶ既存の講義が、キャリア教育関連科目と位置づけられることもある。このような形でキャリア教育が実施される背景には、大学で扱うキャリア教育の内容や範囲などが明確にされていないことがある。それに伴い、講義を担当する教員は、専任教員、特任教員、非常勤講師のほか、専門家や企業関係者などの実務経験者が加わる場合もある。

もっとも、現在、大学で実施されている正課のキャリア教育は、教養科目として開講される場合が少なくない。その理由の1つとして、猪俣（2018）は、「授業科目としての目標や内容の自由度が高く幅広い内容で実施可能であるため、専門科目としての位置づけも可能であるが、体系を重視する専門科目に対して、専門以外の分野も含めて幅広い学習を求める教養科目のなかに位置付ける方がカリキュラムの整合性を保ちやすい」ことをあげる。教養科目としてのキャリア教育は、講義内容が多様性に富むとともに、実施に際しても柔軟に対応できる余地が大きいと考えられる。また、大学で実施されるキャリア教育のシラバスをみると、学生同士のグループワークなどアクティブ・ラーニングの手法を取り入れている授業が多い。キャリア教育の場合、教員による講義形式の授業だけでは十分な教育成果を得ることが難しいのかもしれない。学部や学年を超えて様々な学生が受講する教養科目には、目指す進路や方向性などの異なる学生が集まることから、グループワークなどを通じて学生の視野の広がりや思考の深まり、コミュニケーション力の向上などが見込まれるだろう。

本事業は全学共通教養科目として開講した。受講生は普段接する機会のない学生と出会い、教員による講義や社会人ゲストの講話、体験（実習）などを通して、通常の教員主体の講義とは異なる学びの時間と機会を得ることになった。正課の講義であるため、受講生は、毎週必ず自身のライフ

キャリアと向き合うことになる。その結果、職場、家庭、地域などにおいて経験を積みライフキャリアを築いていくことの意義を、学生自身が自らの問題として理解し、自分の将来について具体的に考え言語化する姿を確認することができた。学生の社会的・職業的自立を円滑に進めるためには、大学と社会をつないで、社会への橋渡しをしながら、社会の中で生きていく力を育み、将来設計の助けとなるようなライフキャリア教育が求められるだろう。今後は、本事業で明らかになった成果や課題などを確認して改善を図るとともに、学内のキャリアセンターや他のキャリア教育科目とも連携を図りながら、学生と大学にとって、より良い形でキャリア教育が実施、展開されるように取り組んでいくことが必要になると考えられる。

(参考文献)

- 中央教育審議会、1999、「今後の初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(答申)。
- 中央教育審議会、2011、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)。
- 猪俣歳之、2018、「高度教養教育としてのキャリア教育科目—現状と課題—」、羽田貴史編『グローバル社会における高度教養教育を求めて』、東北大学出版会、p. 197-205。
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002、『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)』。
- 児美川孝一郎、2015、「「夢と現実の振り子」から一步踏み出したキャリア教育を」、『Between』、ベネッセコーポレーション・進研アド、264、p. 10-13。
- 熊谷朋子、2020、「多様化するキャリア教育の現状と課題—日本における大学生の流動性の視点から—」、『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』、7、p. 303 - 309。
- 宮田弘一、2018、「大学の「キャリア教育」に関する研究 —回顧と課題—」、『広島大学高等教育研究開発センター大学論集』、50、p. 287-302。
- 文部科学省、2004、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』。
- 村上純一、2016、「キャリア教育政策をめぐる 이슈・ネットワークの変遷」、『教育学研究』、日本教育学会、83(2)、p. 43-55。
- 内閣府、2003、「若者自立・挑戦プラン」(<https://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/0422wakamono.html>)
2021年1月29日閲覧
- 荻野佳代子、2019、「ライフキャリアの視点から見たキャリア教育の方向性」、『神奈川大学心理・教育研究論集』、45、p. 19-28。
- 菅原良、2017、「大学におけるキャリア教育の変遷と複雑化・高度化する21世紀型キャリア教育の方向」、『キャリアデザイン研究』、日本キャリアデザイン学会、13、p. 137 - 143。
- 鈴木紀子、2019、「男女共同参画視点にもとづくキャリア教育の実施と展開」、『ポリモルフィア』、九州大学男女共同参画室、4、p. 81 - 86。
- 若者自立・挑戦戦略会議、2004、「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/021.htm) 2021年1月29日閲覧
- 渡邊有紀子、2017、「誰が大学におけるキャリア教育科目を担っているのか—「外部からの人材」に着目して—」、『キャリアデザイン研究』、日本キャリアデザイン学会、13、p. 95 - 104。

2. アクティブ・ラーニングの観点から見る本プロジェクトの評価と課題

(1) 目的

本稿において筆者に与えられた課題は、第三者的な観点から神大ワーク&ライフデザイン教育プログラムを評価することである。筆者は、アカデミック・ライティングを中心とするアカデミック・スキルやアクティブ・ラーニングを専門領域の一つとしており、新潟大学教育・学生支援機構において、アカデミック・ライティングに関する研究や教育プログラムの構築と実施に携わっている。神大の教育プロジェクトに関しては、2019年度から2020年度の2年間にわたり、プログラム構築のためのワーキンググループの一員として関わっており、完全に第三者的な立場で本プログラムを評価することは難しいかもしれない。しかし、筆者は本プログラムの実践の場である授業、また地域における本プログラムの実施には関わっていないため、本プログラムを別の教育機関で実施する場合、どのような良さや課題が見えてくるかという観点から見ることも可能であると考えている。以上のような考えのもとで、本章では、特にアクティブ・ラーニングという観点から、本プログラムを評価することを試みることにする。

本教育プログラムの評価に当たって、評価の視点として採用するのは「アクティブ・ラーニング」という教授・学習方法である。アクティブ・ラーニングに着目する理由は二つある。第一に、アクティブ・ラーニングという方法は、2012年に中央教育審議会答申の中で取り上げられて以来、多くの高等教育機関において取組みが進められているものだからである。本教育プログラムを参考にして何らかの教育プログラムを実施しようとする際、プログラムを実践する者にとって、アクティブ・ラーニングの実践方法として本プログラムをどのように活用できるかということは興味のあることだと思われる。第二に、本教育プログラムには多くのアクティブ・ラーニングの実践例が含まれているが、その実践は、2020年度における新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、ほぼオンラインで進められた。この点で、本プログラムの実践やその中で見えてきた課題や工夫は、オンラインで実施されたアクティブ・ラーニングの実例として意義のあるものであり、今後オンラインでの授業やプログラムの実践に取り組もうとする者にとって、参考になる点が多く含まれると考えるからである。

本稿では、まず、アクティブ・ラーニングの考え方について概観する(2-a)。次に、アクティブ・ラーニングの観点から見ると本プログラムをどのように評価することができるのかについて述べる(2-b)。最後に、本プログラムの残された課題について述べて終わりとする(3)。

(2) アクティブ・ラーニングの観点から見る本プロジェクトの評価

(a) アクティブ・ラーニング

中央教育審議会の答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』(2012)は、わが国が現在置かれている状況について次のように分析している。すなわち、かつて工業社会として成長していた時代とは異なり、現代では、政治、経済、社会、文化などの多方面にわたる構造的変化に直面しており、さらにはグローバル化や情報化の進展などにより個人にとっても社会にとっても将来の予測が困難な時代が到来していると言う(中央教育審議会, 2012, p1)。この将来の予測困難性にどう立ち向かうかという問題は、2020年度中に我々が経験し、未だ収束の見通しが見えない新型コロナウイルス感染症の世界的流行を考えても深刻であることは明らかである。

このように社会構造が大きく変化し、これまでの価値観がゆらぎ、将来の予測が困難な時代を乗り越えるために不可欠なのが、人材の育成である。中央教育審議会(2012)によれば、特に高等教育において求められるのは、「国民一人一人が主体的な思考力や構想力を育み、想定外の困難に処

する判断力の源泉となるよう教養、知識、経験を積むとともに、協調性と創造性を合わせ持つことのできるような大学教育への質的転換」(p7)である。

この大学教育の質的転換のあり方について具体的に示したのが以下の引用文であり、この中で能動的学習(アクティブ・ラーニング)という言葉が使われている(p9)。

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

また、初等中等教育における学校教育のあり方に関するものであるが、中央教育審議会の答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』(2016)においても、アクティブ・ラーニングに対する考え方がまとめられている。高等教育に関するものではないが、アクティブ・ラーニングに含まれる視点をより踏み込んだ形で説明したものとして意義があるものであり、高等教育におけるアクティブ・ラーニングのあり方にも繋がるものであると考えられるため、ここで紹介することとする。

上記の答申では、アクティブ・ラーニングの視点は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために必要な授業改善の視点として位置づけられている。この実現目標とされた①主体的で、②対話的で③深い学びとは、次のようなものとして示されている(中央教育審議会, 2016)。

①主体的な学び: 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

②対話的な学び: 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

③深い学び: 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

以上のようなアクティブ・ラーニングの視点と「主体的・対話的で深い学び」の視点をもとに、次項では、これらの視点から見た本プロジェクトの評価と課題について述べることにする。評価や課題のための資料としては、プログラムの担当者により作成された授業資料や実施後のコメント、受講生に対して実施されたアンケートの結果を用いる。

(b) 本プロジェクトの評価

本プロジェクトは、「若者が男女共同参画の視点に立って、自らの将来の職業や様々なライフイベント、社会において果たす役割等を含めたライフキャリアについて考える機会を充実させる教育プログラムを開発すること」を目的とするものである。プログラム開発においては、以下の3つの特徴を持つものが目指されている。すなわち、①ライフプランニングは男女共に必要性が高く、男女がともに学ぶことに意義があることから、男女共修のプログラムであること、②卒業後の就職に特化したキャリア講座ではなく、ワーク・ライフ両面における様々なライフイベントを見据えた長期的視点でのキャリア展望を可能とするプログラムであること、③育児期女性のキャリア支援といった地域課題を踏まえた地域連携プログラムであることの3つである。

本教育プログラムにおいては、学生やプログラム参加者がそれぞれのライフキャリアを展望するということを目的として掲げており、その目的を可能にするための様々な学習・指導方法として、前項で見たようなアクティブ・ラーニングの視点や実践を非常に多く取り入れていると評価することができる。この点に関し、先に紹介したアクティブ・ラーニングの3つの視点：①主体的な学び、②対話的な学び、③深い学びから見てみたい。なお、課題については最後に述べるため、ここでは触れない。

①主体的な学びの視点

本プログラムは、「学び」を大学における学びや特定の科目の学びに限定することなく、大学という枠を超えて、人生の様々な場面で出会うものとして広く位置づけている。プログラムにおいて学生がライフキャリアを考える上で通底する枠組みとして用いられている「ハンセンの4領域」では、「学習」が重要な1つの視点として位置づけられている。学生には、「学習」という領域を、ライフキャリアにおける独立した領域として捉えるのではなく、それを他の3つの領域（仕事、愛・家族、余暇・地域）と関連付け、その重なり合いや統合を模索するという機会が、授業を通して一貫して与えられている。このような生涯を通じた学びという長期的な視点、さらには学校の中での学びや仕事に必要な学びという視点を超えて、様々なライフイベントにおいて学びを位置づけるという広い視点は、学生に対して学びに関する新たな視点を与えるものである。

この新たな視点をしっかりと受け止め、考察を進めたと思われる学生の発言がある。例えば、学生の最終プレゼンで示された「学習」に関する考え方の変化や気づきに関するものがある。学生は、共働き家庭へのインターンを経験する前には、学習を大学での学びと捉えていたり、仕事・職業に合わせた学習を念頭に置いていたことが分かる。しかし、インターン経験後には、「大学卒業しても勉強は必須」、「家庭を持つことを考えると家事がある程度こなせるようになる必要があると感じた」、「日々の仕事の中でも学びになり得ることはたくさんある」、「子育てについて」学びたい、「子供と上手に接したい」、「学生のような学習ではなく日々の生活の中で学ぶこともある」といった点、また、ジェンダーに関しての考え方の変化を指摘している学生もいた。

学校や仕事での「学習」という捉え方を超えるこのような学びの視点は、共働き家庭での親へのヒアリングという実体験を通じ、ワークライフバランスを実践しているロールモデルに出会い、彼らのこれまでの人生における悩みや苦労や工夫を聞くことで得られたものだろう。その気づきを促すための教材が、ハンセンの4領域であり、これを繰り返し使用して実施したワークである。4領域シートは、様々な段階（授業の1、5、10-12回、課題）において、そして、様々な対象（自分自身、ゲストスピーカー、共働き家庭の親、課題教材に登場する人物）に対して、分析枠組みとして用いられている（Ⅲ-3-(2)参照）。このような段階を踏んだ繰り返しによって、4領域シートは、異なる人生を歩んできた様々な人から得たライフキャリアの視点に対して使われ、その都度、学生は、領域間の重なり合いや統合の視点について考えるきっかけを得、最終的に自己を振り返って人生における学びの意味を主体的に考えることができるようになったのだと考えられる。

②対話的な学びの視点

「対話」は本プログラムの主な特徴である。授業のシラバスや資料から読み取れる限りでは、学生が全く発言をせずに終了した授業は一度もなかったのではないかと思われる。正課授業に参加した学生は、授業内での様々なグループワークでの学生同士の対話、授業を担当する教員やスチュー

デント・アシスタント（SA）を務める学生との対話にとどまらず、ゲストスピーカーへのインタビューや共働き家庭へのインターンシップでのご家庭での対話を経験している。

学生は、このような対話を通し、様々な学びを得ていることが次のような発言からも分かる。例えば、「さまざまな学生さんや社会人の方の意見や考えを直接聞くことができた」、「自分以外の考え方を聞くことで、様々な意見のあり方について学ぶこと」ができた、「親以外の社会人の人生から考えたこと、これからの展望を聞いたことは、新たな考え方・チャレンジする方向性などを学ばせてくれた」、あるいは、「非常に視野の広がる授業だった。それこそ幸せの形は本当にそれぞれで、それを教えてくれた3ヶ月だったなと思います」という発言やアンケートへの回答がある。

これらの発言から分かるのは、学生が非常に多くの人々と関わり対話をすることによって、ライフキャリアの多様性について学んだ結果、各自の今までのキャリアや人生に対する考え方の狭さや固定化して捉えていたことに気づき、もう一度それぞれの10年後の自分の姿について見つめ直すことが可能となったということであろう。ある学生の言うように、「授業でのお話や社会人の方のお話、ご家庭の方のお話から自分の考えを変えることができ、新しい選択肢を増やすことができるような教育プログラムであり、自分のキャリアを自分だけで考えるのではなく、「様々な人との交流を通してこれからも自分自身のキャリアについて考えていくことの重要性に気がつくことのできるような授業内容であったのだと思われる。このことは、この授業に参加したゲストスピーカーやインターンシップの受け入れ先家庭からの次のようなコメントからも分かる。「学生にも受け入れ家庭にも学びがある」、「学生からの質問をメモしていたのですが、それが私にとっても大事な振り返りの時間となり、すごく勉強になりました」、「学生たちの近況や悩みを聞くうちに、自分自身を振り返る良い機会とな」ったというものである。

このような対話的な学びを促すことができたのは、本プログラムの授業を担当したスタッフが充実していたことに依る部分も大きいと思われる。本授業は、大学教員（実務家教員含む）、プロジェクトの委託先企業のスタッフである社会人、SAを務める学生スタッフによって提供され、学生15名から20名に対し、サポートスタッフが6名から10名という体制で実施されている。「最初は質問できるかなと不安でした」という学生もいるように、最初からグループワークでの対話や社会人へのインタビューがうまくできるわけではない。特に、2020年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響で、本プログラムの正課授業はオンラインで実施されたため、対面授業と異なり、グループワークでの演習も対話もより一層の困難を伴ったであろうと予測できる。しかし、授業担当者は、オンライン授業用のツールとして使われているZoomのグループセッションを活用し、小グループを作成してワークを進めたり、情報を共有するためにホワイトボード機能をツールとして用いるといった工夫をし、教員やSAがファシリテーターとして対話を促していた様子が授業記録からも見てとれる。また、初対面の社会人やインターンシップ先の家庭でのインタビューに関しては、ヒアリングの事前練習、子どもとのコミュニケーションプランの事前検討など、学生にとって十分な準備や練習の時間が確保されている。対話やインタビューを上手に進めるためのこのような過程を整えたからこそ、多様な人々との対話を経て、結果として対話的な学びが可能となったのではないかと考えられる。

③深い学び

既に見てきたように、学生は、ジェンダーとキャリアに関する講義、ゲストスピーカーの講演とインタビュー、共働き家庭へのインターンシップ、様々な授業内ワークや課題といった学びの過程の中で、「学習」の捉え方に関する新たな視点を得、「ライフキャリアの多様性」に関する気づきを得ている。ここでは、さらに、本プロジェクトが重視している男女共同参画の視点、「人の生き方＝ライフ・キャリアにおける固定的性別役割分担意識の影響」に関し、学生たちの学びがどのように深まったのかについて記録から読み取ってみることとする。

本報告書Ⅲ-2-(4)にあるように、正課の授業において「男女共同参画・ジェンダーへの考えを深められたか」という質問に対し、「あてはまる」と「ややあてはまる」という肯定的な回答をした割合が93.8%、否定的な回答がゼロという結果となっており、非常に高い割合の学生がジェンダーへの考えを深められたと考えていることが分かる。上記箇所でも指摘されているように、ユニット

プログラムとして短時間で実施された他大学でのアンケートでは、肯定的な回答をした割合が81.9%であり、「ややあてはまらない」とした回答も9.1%存在している。これら二つを比較すると、上記の正課授業におけるジェンダーへの学びの深化は特徴的だと言えるであろう。ライフキャリアにおける男女共同参画やジェンダー理解が深まったと思われる学生の発言としては、次のようなものがある。「自分のキャリアだけでなくパートナーや子どもを含めたキャリア構築の重要性和難易度を学べた」、「マミートラックという言葉やジェンダーに関する色々な人の意見を聞けて、キャリアを見つめる良い機会になった」、また、最終プレゼンでは、男性の育休取得率の低さや、家事分担が女性に偏っていることの指摘、家族を優先しながら働ける職場の条件からの考察を行った発表も見られた。

このようなジェンダー理解を促すことのできた理由の一つとして考えられるのは、ジェンダーという視点について、講義や様々なワークの中で一貫して触れ、考察対象に対して多角的な考察を求めているという点である。例えば、第4回と第5回の講義形式での授業、第8回目の共働き家庭へのインターンシップの振り返りや第10回目の授業全体の振り返り、さらには中間課題でも、ライフイベントとジェンダーの問題との関わりについて考察を促す内容となっている。一方、ユニット型プログラムにおいては、時間の制約もあり、ジェンダーに関する講義やワークという形では実施されていないため、ジェンダーとキャリアの関連付けについては各受講者に委ねられたところもあり、上記のような回答の差に表れたのではないかと考えられる。

(3) 課題

最後に、本教育プログラムの課題について述べたい。ただし、以下で述べる事柄は、本プログラムに特有な課題というよりも、むしろアクティブ・ラーニングの要素を持つ授業が共通に抱える課題とも言える。また、いずれの問題についても本プログラムの実施者らによって認識されているものであり、授業内でも問題解決に向けての工夫や試みがなされたことは最初に触れておきたい。

ここでは、松下(2015)が指摘する次の二つの問題に注目したい。すなわち、①知識(内容)と活動の乖離、②能動的学習をめざす授業のもたらす受動性という問題である(p5)。松下(2015)は、これらをアクティブ・ラーニングを導入することによっても解決が難しい問題、そして新たに生まれてきた問題として挙げている。

①知識(内容)と活動の乖離

第一の問題に関して、松下(2015)は、講義を中心とした授業では知識の伝達に多くの時間を割くため、学生は知識を獲得する時間が十分に与えられる。一方、アクティブ・ラーニングを実施すると、ワークなどの活動に授業時間を割く必要が生じるため、知識伝達のために確保できる授業時間は減らざるを得ない。しかしながら、アクティブ・ラーニングを通じてより高次の深い考察を学生に促すためには、そのための知識の獲得は必須となる。この知識と活動とをどう両立させるかという問題が、アクティブ・ラーニングの残された課題だと言う。

アクティブ・ラーニングが内化に偏った講義中心の授業を批判し、知識の外化を重視するあまり、結果的に内化を軽視することになりがちであるという問題に対し、松下が示すのは次のような方向性である。知識の内化と外化は、学習サイクルの中で組み合わせられて初めてより深い考察を可能にする。講義等の受講によって内化された知識は、それが外化されるような活動(その知識を使って人に説明したり、発表したり、書いたりすること)を通じ、そこで問題解決のための道具として使われる。この学習過程を経ることで知識が再構築され、理解がより深まっていくと言うのである(松下, 2015, p9)。

本プログラムにおいては、個人やグループで実施する多くのワークと共に、ゲストスピーカーの講演へのインタビュー、インターンシップ、最終プレゼンテーションといったアクティブ・ラーニングが採用されている。一方では、知識の伝達と獲得に割かれた講義形式の授業回数は2回分とかなり短くなっている。授業担当者による振り返りでも、授業時間の短いこともあり、伝えたいことが伝わっているのかという心配の声も見られた。しかしながら、本プログラムでは、同時に、講義

で得られた知識を内化するための活動（ワーク）における工夫もされている。すなわち、第4回ではジェンダーを社会の構造という視点から、第5回ではジェンダーを個人の意識やキャリアとの関係という視点から講義で説明し、それぞれ異なるワークと組み合わせて実施している。特徴的なのは、ジェンダーを構造という視点で捉える講義と個々人の人生と結びつけるすぐろくのワーク、ジェンダーを個人的視点から捉える講義と社会状況を表す様々なデータを読み取るワークという、対比する視点の講義とワークを組み合わせていることである。

この知識を内化するためのワークということに関し、前述したように、本プログラムの正課授業では、ライフキャリアに関する講義でも説明された「ハンセンの4領域シート」について、様々なワークで多角的に用いることで、学生が徐々にキャリアの捉え方を広げられていたことが見られた。また、共働き家庭での家事の分担、育児休暇の取得が困難であることへの気づきから、将来または現在の具体的な行動に移そうとする発言も見られた。この点においては、キャリアや性的役割分担に関する個人的視点が拡大されたり修正されたりしていると見ることもでき、学生の考察はより深まったものと評価することができる。

しかし、学生による最終プレゼンや授業ごとの振り返りを見る限りでは、自己のライフキャリアを考える上で、社会構造や制度の観点も含めた発表は少なかったようである。また、ゲストスピーカーのコメントや授業の振り返りの中でも、浅い質問に終わってしまい、さらに深掘りするようなやりとりにならなかったという感想、また、個人的な視点を超えるような一歩進んだ考察が見られない発表もあったとのコメントが見られた。社会人経験や人生経験の少ない学生にとっては、個々人の選択やライフキャリアを社会構造の視点から見ることが難しいであろうことは想像に難くない。したがって、この点に関する知識の内化をさらに深めるためには、知識の内化と外化のサイクルをもう少し増やし、知識への理解をより深める過程が必要だったのではないと思われる。授業担当者からの振り返りでも述べられているが、すぐろくのゲームや資料集が学生の気づきに有用であったようであり、これらを活用した知識の内化のための時間をもう少し確保し、内化→外化→内化の深化という学習サイクルを繰り返すという方法もあり得たかもしれない。また、ジェンダーとキャリアに関する2回の授業が実施された後に、個人的な視点と制度的な視点からのゲストスピーカーへの質問項目を検討し、ゲストスピーカーとのやりとりの中でさらに考察を深めるといった流れも考えられる。ただし、本プログラムの授業時間と取り組む授業内容の豊富さを考えると、本正課授業の応用科目として、ジェンダーとライフキャリアに関して社会構造や制度という視点から学ぶための科目を設置することも、十分に考えられるだろう。

②能動的学習を目指す授業のもたらす受動性

第二の問題は、アクティブ・ラーニングでは学生は様々なワークへの参加を促されるが、一方でそれらの活動への参加は学生の主体的な決定によって生じるものではなく、準備され構造化されたアクティブ・ラーニングに「受動的に」参与することになりうるということである。また、グループワークが多いことから、個々の学生の分担の範囲が曖昧となり、場合によっては、グループ内での不均等な役割分担が生じてしまうという問題も生じやすい（松下，2015，p5）。

まず、後者の点については、本プログラムでも、グループワークでの学生間の発言や参加の度合いが違うことや、授業に欠席する学生への対応について、何らかの対策が必要であるとの振り返りがなされていた。特に、オンラインでの授業だったこともあり、グループ内で学生同士がコミュニケーションを取ることが通常よりも難しかったことも指摘されていた。この問題に関しては、学生一人一人の参加を促すような、オンライン授業で活用できるツールを駆使することも有用であろう。例えば、グループでの作業経過を残すためのファイルやメモの共同編集機能、チャット機能や掲示板、ホワイトボード機能などをあらかじめ準備することが有効である。その際、それぞれのツールの使用法が分からないことからグループワークにうまく参加できなかったということのないよう、画面の向こう側にいる学生に対し、利用法について丁寧に説明することも重要である。なお、前項で見てきたように、本授業においては、ツールを使いこなせていない学生へのフォローがしっかりとされていた。また、グループワークの中で、オンライン上でのホワイトボード機能を活用し、全員が参加できるような形で授業を進めていた回もあり、どの学生にも均等に発言を促す工夫

としては参考になるだろう。さらに、オンライン授業でグループ分けをするとそれぞれのグループへの目配りが難しくなるため、本授業のようにSAやTAも含む充実したスタッフがファシリテーターとして、各グループの議論や作業をサポートすることも必須であろう。

アクティブ・ラーニングへの参加が構造化され、学生の主体的な活動がかえって制限されることになってしまうという前者の問題については、様々な克服の方法がありうらと思うが、ここでは二つの方向性を示したい。第一は、ルーブリック評価の導入による学習の到達目標の明確化と、これによる学生の自己評価を促し、学生の学習への意欲や自己認識の深化につなげるという方法である。第二は、「書く」ことをワークの一つとして追加することにより、学生の課題に対する主体的な関わりと学びの深化を促すという方法である。

ルーブリックとは、「パフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度にみられるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される、評価基準の記述形式」（西岡，2004）である。これは、教員の評定において用いられると同時に、事前に学生に示すことで、学習の到達目標が明確化され、学習過程での自己評価が可能となり、自律的な学習を促すことに繋がる効果があると評価されているものである（寺嶋・林，2006）。

本プログラムへのルーブリックの導入方法としては、授業を通して一貫して用いた4領域シートについて、学生の自己評価が可能となるルーブリックを提示することが考えられる。このような評価基準を用いることで、学生は、自分の考察に何が足りず、どのように改善すればより浅い理解から深い考察へと進めることができるのか、教員側が何を求めているのかを明確に理解できるようになる。特に、異なる対象に対し4領域シートを作成するというワークを何度かにわたって実施しているため、ルーブリックによる評価を合わせて用いることで、学習の効果や深化を可視化することも可能となるだろう。

第二に、書くことにより主体的で深い学びを促すという方法がある。井下（2019）は、書くことで思考が深まる理由として、次のことを挙げている。すなわち、書くという行為は、自分の主張は何か、主張を根拠づけるデータや資料はあるか、論理的な説明ができていたかといったことについて、思考を明確にすることを求めるものである。この考えることと書くことのサイクルを繰り返すことで、思考が深まっていくのだと言うのである（p13）。

本プログラムでは、中間課題や最終課題のプレゼンテーションにおいて、内化した知識を外化するためのワークが組み込まれている。ただし、前述したように、学生の主体的で深い学びのために必要となる、様々な知識を相互に関連付けより深く理解すること、情報を精査して考えを形成すること、問題を見いだして解決策を考えることといった学習過程の提供という意味では少し弱かったのではないと思われる。学生の深い考察をさらに促すためにも、主体的に個人を超える社会の問題を発見し、必要な情報の調査や社会人へのインタビューをしたり、統計データを確認したりすることで問題を掘り下げ、問題解決に向けた考察を深めるという学習を必要とする「書く」というワークを導入することが検討されても良かったのではないと思われる。

例えば、地域連携プログラムでのエピソードとして、次のようなものがある。子育て中の女性に対し、女子学生が、就職活動で将来子どもがほしいということを素直に言っても良いのかどうか相談していたというのである。この女子学生の質問の背後には次のような社会的状況があると考えられる。女性が妊娠し子育てをすることで不利な扱いを受けがちな社会構造があること、就職時にそのことについて質問されることが多いこと、男子学生に対し、将来結婚する予定があるか、子供を持つ予定があるかという質問をされることは通常はないことなどである。これは一つの例であるが、本プログラムに特徴的な多様な社会人との関わりを通じて学ぶという強みを活かし、ジェンダーとキャリアに関して、個人の選択の問題ではなく社会構造の問題が絡んでいる問題を社会人へのインタビューから発見し、資料調査や統計データと照らし合わせ検討し、考察をまとめて書いてみるということも、考察を拓き深める方法の一つとして検討できるのではないと思われる。

以上、本教育プログラムを含むアクティブ・ラーニングに共通して生じうる課題について検討を行った。しかし、上記の検討は、本プログラムがさらに拡がり発展の可能性をもつことを示すものであり、プログラムの評価を減じるものではない。

(参考文献)

- 中央教育審議会、2012、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」。
- 中央教育審議会、2016、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」。
- 井下千以子、2019、『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶應義塾大学出版会。
- 松下佳代編著、2015、『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を深化させるために』勁草書房。
- 西岡加名恵、2004、「評価指標(ルーブリック)」日本教育方法学会(編)『現代教育方法事典』図書文化社、293頁。
- 寺嶋浩介・林朋美、2006、「ルーブリックの構築により自己評価を促す問題解決学習の開発」『京都大学高等教育研究』、12、63-71頁。

V. おわりに

報告を終えるにあたり、2年間の本事業に多くの方々・機関からさまざまなご協力ご支援を頂きましたことに心より感謝申し上げます。

- ・ 講演、家庭での体験を受け入れてくださった皆様
- ・ 実行委員、ワーキンググループの皆様
- ・ 神奈川県福祉子どもみらい局人権男女共同参画課(実行委員会)
- ・ 横浜市政策局男女共同参画推進課(実行委員会)
- ・ よこはまグッドバランス賞受賞企業(株)ダッドウェイ、住電オプコム(株)
- ・ 公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会 男女共同参画センター横浜(実行委員会)
- ・ スリール(株)(再委託・実行委員会)
- ・ 特定非営利活動法人かながわ女性会議(再委託・実行委員会)
- ・ 神奈川県立かながわ男女共同参画センター(かなテラス)
- ・ 神奈川区地域子育て支援拠点(かなーちえ)

2年間継続的なご支援を頂きましたが、とくに今年度は新型コロナウイルス流行の影響により、多くの対応が必要でした。誰もが経験したことのない状況のなかで、皆様それぞれにご事情もあろうなか本事業にお力を頂きましたことに重ねて御礼を申し上げたいと思います。

今年度はプログラムはじめ企画の多くがオンラインでの実施となりました。対面での交流がかなわなかったことを大変残念に思っております。一方、体験型のプログラムをオンラインで行うというある意味で挑戦的な取組ができ、対面が制限されるなか学生にとって貴重な交流・学びの機会を提供できたのではないかと手ごたえを感じております。対面かオンラインか、今後両方の良さを取り入れより良いかたちを模索していきたいと考えております。また、急速なオンライン化の普及は、プログラムの方法にとどまらず、私達の今後の働き方・生き方まさにライフキャリアそのものに大きく影響するものと思われまます。

2年間の取組を通じて「男女共同参画の視点に立ったキャリア教育」により学生たちが成長する姿を目の当たりにし、意義や必要性の高さと同時に難しさにも直面し試行錯誤して参りました。自らの生き方、キャリアが自らを取り巻く環境、社会の状況と深く関わることへの気づき、意識・知識を行動へとつなげる学びのプロセス、半期をかけたプログラム、2年間の事業だからこそ見えてきたものもあります。2年間多くの方々との出会いと交流から、学生だけでなくこのプログラムや私自身も多くを学ばせて頂きました。

事業は今年度で終了をいたしますが、これまでの課題を整理し、今後さらなる発展、普及に取り組んで参りたいと思います。今後ともご支援を賜れば幸いに存じます。

ありがとうございました。

神奈川大学人間科学部

荻野 佳代子

執筆者一覧（五十音順）

井上 匡子 神奈川大学 法学部 教授

担当：Ⅲ－4（2）～（5），Ⅲ－5.

大野 恵理 神奈川大学 法学部 講師

担当：Ⅲ－2（3）（課題1），（5）-2（共著）.

荻野佳代子 神奈川大学人間科学部 教授

担当：Ⅰ～Ⅲ－1，Ⅲ－2（1），（2），（4）-2，-3，
（5）-1，-2（共著），-3，Ⅲ－3（2），Ⅲ－4（1），Ⅲ－6，
Ⅲ－7，Ⅴ.

喜多村佳美 スリール株式会社

担当：Ⅲ－2（3），Ⅲ－2（4）-1.

島 亜紀 新潟大学 教育・学生支援機構コモンリテラシーセンター 特任准教授

担当：Ⅳ－2.

鈴木 紀子 日本女子大学 現代女性キャリア研究所 客員研究員

担当：Ⅲ－3（1），Ⅳ－1.

神奈川大学
令和二年度 文部科学省 次世代のライフプランニング教育推進事業
神大ワーク&ライフデザイン教育プログラム 報告書
～地域連携による男女共同参画推進を見据えたキャリア教育

発行日：令和3年3月5日

発行：神奈川大学

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3丁目27番1号

電話 045(481)5661 内線 2261

編集：荻野 佳代子(人間科学部) 井上 匡子(法学部)

印刷：株式会社 江森印刷所